埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第９１集

川端遺跡　　１次調査
荷鞍ヶ谷戸遺跡２次調査
向山遺跡　　１次調査

2007.3

深谷市教育委員会

例　言

１．本書は平成 17 年までに深谷市旧川本町地内で行われた発掘調査報告書である。
２．本書の編集作業は、平成 18 年度に深谷市教育委員会が行った。
３．本書の編集・執筆は、深谷市教育委員会川本事務所　村松篤が行った。
４．本書掲載の図については、遺構のスケールは原則として 1／80、遺物のスケールは１／８とした。
５．出土遺物の保管と詳細なデータは、深谷市川本出土文化財管理センターで管理する。
６．本書の作成に際して、調査報告書デジタル化制作（凸版印刷株式会社）、について委託した。
７．遺構遺物の詳細情報については、川本出土文化財管理センターホームページの深谷市遺跡情報データベースで公開している。そのため本書は遺跡調査のカタログ機能を果たしている。なお、図中の遺物番号は遺構番号横の No.とあわせてコード番号となる。

川端遺跡 1 次調査

１．本書は、埼玉県深谷市畠山字川端 935-1,937 番地に所在する川端遺跡１次調査の発掘調査報告書である。
２　発掘調査の原因は畠山地区集落排水事業処理施設建設工事で、調査は川本町教育委員会が町産業課から依頼を受け発掘調査を実施した。
３　発掘調査及び整理作業の期間は以下の通りである。
　発掘調査　昭和 62 年 11 月 1 日から 12 月 19 日
　整理作業　平成 15 年 6 月 1 日から平成 17 年 6 月 30 日まで
４　発掘担当者は村松篤があたった。

Ⅰ　発掘調査にいたる経過

旧川本町では、早くから農村地域の下水道普及事業に取り組んできた。その最初の事業として畠山西部地区が採択となり、昭和 63 年度の供用開始を目途に管路整備が進められてきた。処理場建設用地について文化財の所在の協議を行ったところ荒川よりの河岸段丘上に位置することから試掘調査を行った後、取り扱いを協議することとした。昭和 62 年 10 月に試掘調査を実施したところ古墳時代から平安時代にかけての遺跡（川本町 NO135、川端遺跡）が所在することが判明した。そこで町教育委員会が主体となり発掘調査を行うこととなった。調査面積は 1000 ㎡、発掘届は 2004.11.09 付教文 3-624 号である。整理作業は調査後すぐに水洗・注記・復元を行い、平成 15 年度に遺構図版作成、平成 16 年度に遺物図版作成、平成 17 年度に編集・原稿執筆を行い、平成 18 年度に報告書を刊行した。

Ⅱ　遺跡の位置

旧川本町は、北は深谷市南部に当たり、西は寄居町、南は比企郡嵐山町、東は熊谷市と境を接している。町の中央をほぼ東西方向に荒川が横断しており、北は櫛挽台地、南側に江南台地が広がっている。本遺跡は荒川の右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡は緩やかに南東に向かい傾斜し、遺跡は標高67m付近に位置する。遺跡の北の荒川は畠山重忠の故事で有名な名称鶯ノ瀬となっており、いまは六堰ダムとなっている。

川端遺跡はこれまで 4 次の調査が行われている。最も古い遺物は、1 次調査区から東に 200m 離れた 2 次調査区から縄文時代後期の包含層が確認された。古墳時代以降になると西側に位置する如意遺跡から、古墳時代から平安時代の集落が見つかっていて、南に隣接する如意南遺跡と合わせると 500 軒を越す大集落となる。中世には畠山館跡が位置していて、武蔵武士畠山重忠の故地として知られている。

Ⅲ　　遺構と遺物

調査区は、荒川と接する崖線のすぐ南側に位置しており、全体に南側に緩やかに傾斜する。竪穴住居は 10 軒、掘立柱建物 3 棟のほか 200 本を越す柱穴群が検出されている(註 1)。遺構は調査区南側に集中しており、北半においては削平されたためか遺構密度は薄くなる。

1. 住居跡

古墳時代の住居は、1・8 号住居の 2 軒ある。主に調査区南側に分布しており、全容は明らかでない。1 号住居からは土錘が 5 点まとまって出土している。1・2 号建物も古墳時代のものと考えられる。

古代の住居は、2・3・5・6・7・9・10 号住居の 7 軒である。7 世紀末から 8 世紀初頭に位置づけられる 5 号、6 号住居は一辺 7m前後の方形の大型住居で南北に並んで検出された。8 世紀前半の住居は 3 号住居がある。方形を呈し、 4 本柱穴が検出された。北壁にかまどを作りつけ、かまどは長胴甕を補強としている。9 世紀前半の住居としては 7 号住居があげられる。かまどを東壁に設けていて、今回検出された住居の中で唯一主軸が東西方向に振れている。他の 2・9・10 号住居は出土遺物が少なく、詳細な時期は不明である。

2. 掘立柱建物と柱穴群

掘立柱建物は、3 棟検出され、他に 200 本を越す柱穴群が調査区南地区を中心に検出された。1 号建物は柱穴群の北端で調査区東端で確認され一間二間の規模である。2 号建物は調査区北端に位置しており、北半は遺構外に広がりを見せており詳細は不明である。3 号建物は、南側の柱穴群で検出されたもので、一間二間の東西棟で調査した範囲内では東側にさらに一間張り出し、西側には棟持柱が検出されている。柱穴内からは遺物が出土し、中には緑釉陶器破片が出土する柱穴が見られる。

柱穴群は調査区南半で住居群の合間を縫うように検出されており、200 本を越す数が確認されている。柱穴は 0.5～1.0m の楕円形を呈するものが主体であり、深さ 0.2～0.5m 程度である。建物の配置が確認されたものは 1 号建物と 3 号建物であった。多くの柱穴覆土には土器破片が混入

している。時期は古墳時代から古代にかけてと推定されるが、6 号柱穴からは青磁碗破片、75 号柱穴からは古銭が検出されていて、中世まで下るものがあることが推定される。

3. 出土遺物

出土遺物は、住居跡を中心に多量に出土している。古墳時代の遺物としては、土師器坏・甕の他 1 号住居覆土から銅製の耳環、後世の遺構から円筒埴輪破片が少量出土する。古代の遺物としては、土師器坏・甕、須恵器坏・甕・長頸瓶・蓋・小型壺、紡錘車、羽口が検出され、他に緑釉陶器、灰釉陶器破片が出土している。古墳時代から古代にかけての遺構からは 100 本を越す土錘が検出されていて荒川縁辺における生業の一端を示すものと注目される。

中世の遺物としては、青磁碗、古銭、瀬戸美濃陶器が少量検出されている。

Ⅳ　まとめ

川端遺跡が位置する畠山地区は、武蔵武士の鑑とうたわれる畠山重忠出生地と伝えられ、関係する史跡が多く残る。中世には畠山庄と呼ばれており、重忠活躍の裏づけとなる豊かな土地柄であったことが類推される。川端遺跡は、荒川のほとりに位置しており、川幅は狭く水運に恵まれた要所と考えられる。また、鶯ノ瀬の伝承に伝わる浅瀬（基盤の岩が高い）であったと考えられ、陸路における要所でもあったことが推定される。

1 次調査では、古墳時代から古代の遺構遺物が発見された。中でも男衾郡域ではこれまでに調査された遺跡では、緑釉陶器を出土する遺跡はなく、出土する 3 号建物は特筆される(註２)。また、5・6 号住居から出土した 7 世紀末から 8 世紀初頭の土器群は、寄居町末野窯址群の変遷を考える上で類例の少ない貴重な例としてあげることができると考えられる。また、土錘は本調査区から 100 本以上が出土した。隣接する如意遺跡でも 2000 本以上の土錘が出土しており、荒川における盛んな漁労活動を示すものと考えられる。

中世の遺跡の様相は、なかなかつかむことができなかった周辺の調査においても中世での遺構遺物の検出は難しく、今回柱穴内から出土した青磁碗や古銭などはある意味貴重な発見といえる。1 次調査を行った昭和 63 年当時は周辺でのはじめての調査区であり、周辺の遺跡の様子はまったくわからなかったが今では、川端遺跡で 4 次、如意遺跡で 4 次、如意南遺跡で 4 次の発掘調査が行われ、古墳時代後期から古代にかけての集落の様相が徐々に解明され始めている。今回の報告例を含めてさらに遺跡の構造を検討していきたいものと考えている。

(註１)発掘調査時には住居跡 15 軒、建物跡 1 棟、柱穴群と認識していたが、整理時に見直し遺構数を変更した。

(註２)村松篤　2000　「緑釉陶器を出土する古代の遺跡」埼玉考古 35 号

川端遺跡1次調査遺構観察表

遺構時代	遺構No		説明	グリッド	形態	主軸	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	付属施設(m)	出土遺物
古墳後期	0001	住居	調査区の東壁際に位置しており住居全体の1/5を調査した。方形を呈し、西側のコーナーを検出した。覆土は黒褐色シルトで、調査区内からはカマドは検出されない。柱穴が1本確認される。周溝はなく、床は脆弱である。西側コーナー付近では河原礫10点が集石され、礫に乗るように土師器坏や土錘5点が集中して出土。覆土上層からは耳環が出土する。住居外南1m離れて土師器坏が出土。	K-9	方形	N-45-W	4.00	3.85	0.21	—	有段の土師器坏が特徴(土師器坏4、土錘13、耳環1)覆土中から性格不明の銅板が出土する
古代	0002	住居	調査区東側、1号住居の西に隣接して位置する。ほぼ正方形を呈し、カマドは検出されない。浅い柱穴(0.2m)が4本ほぼ四隅から検出され、東壁際の柱穴間に1本配される。床面はほぼ平坦で礫が露出する。遺物の出土は少ない。	J-9	方形	N-30-W	4.05	3.78	0.13	—	須恵器甕は口縁下に波状文を施す(須恵器甕1)
8世紀前半	0003	住居	調査区南西、南壁は調査区外となる。方形を呈し、北壁にカマドが設けられる。カマドは両袖に棒状の石が据えられ、カマド全面に補強に使われていた土師器甕が横倒しの状態で出土する。柱穴は4本検出され、北西隅から円形の貯蔵穴が検出される。床面は平坦で礫層となる。カマド前面から土師器甕が出土する。	I-12	方形	N-40-W	4.42	4.16	0.35	カマド(北壁)2.90×0.95×0.38	須恵器坏は、底面周辺へら削り、胎土中に多量の砂礫を含み、末野産と推定。土師器甕は胴部上半に最大径を有するタイプ(土師器坏2、須恵器坏1、土師器甕8・高坏1、緑釉椀1、土錘8)
古代	0004	住居	調査区南東、2号住居と6号住居に挟まれて検出した。長方形を呈し、北壁にカマドが設けられる。カマドは煙道が1.8m伸び、壁はよく焼けており、土師器甕、須恵器坏が出土した。柱穴は6本検出されるが、規則性はない。床面は平坦で礫層となる。南壁際から土師器坏を伏せた。	I-10	長方形	N-40-W	6.62	5.86	0.23	カマド1.80×7.20×0.28	須恵器坏は大ぶりの回転ヘラ削り、蓋は小型のものと大ぶりで身の深いものがある。(土師器坏10・甕3・甑1、須恵器坏2・長頸瓶1・盤1、土錘7)
7世紀後半～8世紀初頭	0005	住居	調査区南側ほぼ中央に位置し、南側は調査区外に広がる。6号住居と南北に同じ規模で並んでいる。床面はほぼ平坦で砂礫層となる。カマドは北壁やや東よりに設けられ、あまり焼けてなく、覆土上面から灰釉長頸瓶と小壺が出土する。柱穴は4本確認されているカマドの前面に貯蔵穴状の土坑3基が並んでいる。遺物はカマド前面を主体に土師器甕・坏、須恵器坏が出土する。	G-12	方形	N-0-S	6.66	7.44	0.38	カマド1.00×1.16×0.34	須恵器坏は口縁が直立する底部へら削りが特徴、土師器皿や須恵器高台盤・湖西産長頸瓶などが出土(土師器坏12・皿4・甕8・小型甕1・高坏1・台坏甕1・壺2、須恵器坏5・高台盤1・蓋10・高台坏1・小壺1・長頸瓶3、羽口1、埴輪1、土錘27鉄サイ1、青磁碗1)
7世紀後半～8世紀初頭	0006	住居	調査区南側ほぼ中央に位置し、5号住居の北側にほぼ同じ規模で並んでいる。平面形は方形で、床面はほぼ平坦で砂礫層となる。カマドは北壁に設けられ、あまり焼けてなく、カマドの構築材に用いたと推定される緑泥片岩の板材が出土する。柱穴は8本確認されているが規則性はない。北東の壁際から楕円形の貯蔵穴が配され、土師器坏類が集中して出土する。遺物はカマド前面を主体に土師器甕・坏、須恵器坏・蓋が出土する。	G-10	方形	N-0-S	6.84	7.28	0.25	カマド1.00×1.16×0.18	須恵器坏は大ぶりの底部へら削りのものが特徴、蓋も大ぶりのものと小形で身が深いものがある。(土師器坏13・暗文坏2・皿2・椀2・甕4・甑把手2、須恵器坏5・蓋9・甕3、灰釉高台盤1、羽口1、紡錘車1、土錘25))
9世紀前半	0007	住居	調査区西寄りに位置しており、、6号住居の西側に並ぶ。平面形は長方形で、床面はほぼ平坦で砂礫層となる。カマドは東壁に設けられ、あまり焼けてない。柱穴は3本検出されるが規則性はない。南東の壁際から楕円形の貯蔵穴が検出され、須恵器高台坏類が出土する。遺物はカマド前面を主体に土師器甕・坏、須恵器高台坏・蓋、土錘が出土する。	E-10	長方形	N-90-E	5.06	3.74	0.18	カマド0.62×0.62×0.18	須恵器高台坏と土師器はコの字甕を特徴とする。(須恵器坏2・高台坏3・蓋2、土師器甕3、緑釉陶器1、土錘12)
古墳後期	0008	住居	調査区南壁際で5号住居と10号住居に挟まれて検出された。南側は調査区外に広がる。平面形は不整形で、床面はほぼ平坦で砂礫層となる。カマドは検出されず、柱穴は浅いものが2本検出される。遺物は土師器甕・坏、土錘が出土する。	E-13	不整形	—	5.14	2.60	0.28	—	有段坏が出土(土師器坏1・甕1、須恵器椀1、土錘2)
古代	0009	住居	調査区西南壁際で検出された。西側1/3は調査区外に広がる。平面形は方形を呈し、床面はほぼ平坦で砂礫層となる。カマドは北壁中央に位置し、よく焼けており、煙道は壁の外に延びている。貯蔵穴は住居北東から検出され、柱穴は主柱穴が2本検出される。遺物は北東隅から土錘13点がまとまって出土する。	D-13	方形	N-5-W	4.60	3.36	0.29	カマド1.15×0.44×0.24	土錘出土(土師器坏2、須恵器甕1、土錘13)
古代	0010	住居	調査区北に位置し、周辺は削平されている。方形を呈し北側にカマド状の張り出しを有する。南に1.7m離れて、2.2×1.2mの楕円形の範囲に焼土が認められる。覆土中から鉄滓が出土する。旧12号住居	H-7	方形	N-5-W	3.12	2.64	0.10	—	土錘出土(土師器台付甕1、土錘2)
古墳後期	0001	建物	調査区東側で検出される。一間×二間の南北棟で、柱穴間の間隔は桁行き2.7m、梁行2.5mを測る。柱穴の規模は、径0.5m、深さ0.3～0.4mを測る。旧10号住居	D-9	—	N-0-S	4.70	2.70	—		有段口縁の坏を初め土師器多量に出土するが小破片が多く図示できるもの無し(縄文土器1、土錘2)
古墳後期	0002	建物	調査区北壁際から検出され、周辺は削平される。北側は調査区外に広がりを見せる。柱穴間の間隔は桁行き2.7mを測る。柱穴の規模は、径0.5m、深さ0.3mを測る。旧14号住居	E-5	—	N-0-S	1.50	2.50	—	—	図示できるものなし
9世紀後半	0003	建物	調査区南東隅から検出された。一間×二間で、長軸4.4m、短軸2.2mを計る東西棟で、柱の間隔は、梁行き、桁行きともに2.2m前後で、東側に一間廂が伸び柱間は1.5mを計る。柱穴は径0.6m、深さ0.3mで柱痕は明確ではなく、柱を抜いた痕跡の認められるものもあり、中にローム質土と黒色土が互層になる部分が一部観察された。西側には建物跡の外側に飛び出した位置に棟持柱と推定される9柱穴が位置する。緑釉陶器が出土したのは1・2柱穴に集中し、2柱穴には椀が、1柱穴には皿、段皿類が主体を占める。3柱穴からは灰釉椀1点が出土する	J-12	—	N-90-W	4.40	2.20	—	—	(緑釉陶器碗・皿・段皿、灰釉陶器碗2、須恵器坏1・甕4、土錘2))
古代	0001	柱穴群	調査区南側を中心に、柱穴が密集して183基検出されている。中には建物の柱穴として配列が確認されたもの(1～3号建物)があるが、ほとんどのものは配列は不明である。柱穴内からは土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土するものが多く見られる。時期は明瞭ではないが古墳時代から古代のものが中心で、中に青磁椀や北宋銭が出土したもの(30・号柱穴)など中世のものも混在する	—	—	—	—	—	—	—	(土師器坏2、須恵器坏5・甕5、縄文土器1、埴輪1、土錘9)
中世	0001	柱穴群	調査区南側を中心に、柱穴が密集して183基検出されている。中には建物の柱穴として配列が確認されたもの(1～3号建物)があるが、ほとんどのものは配列は不明である。柱穴内からは土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土するものが多く見られる。時期は明瞭ではないが古墳時代から古代のものが中心で、中に青磁椀や北宋銭が出土したもの(30・号柱穴)など中世のものも混在する	—	—	—	—	—	—	—	(青磁碗1、古銭7)

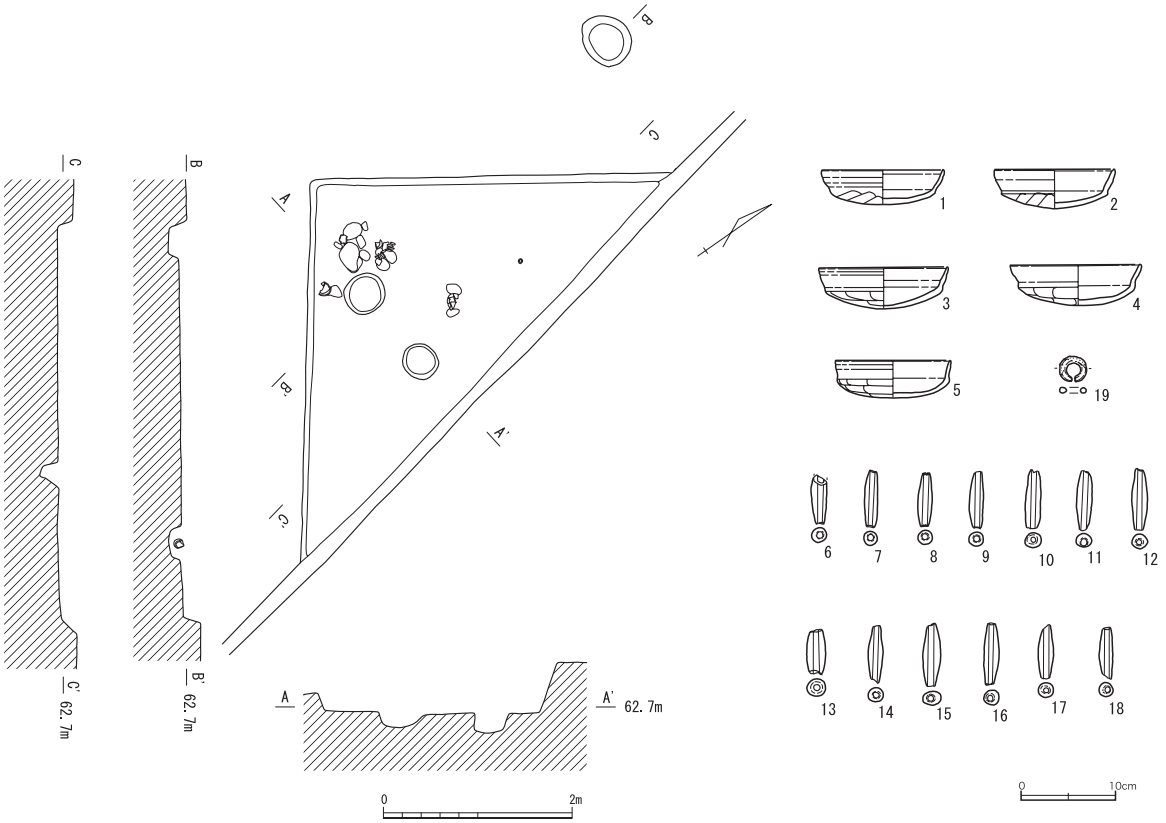
遺跡の位置と周辺の主な遺跡

荒　川
1次調査区（本書
4次調査区
3次調査区
如意遺跡
川端遺跡
0
200m

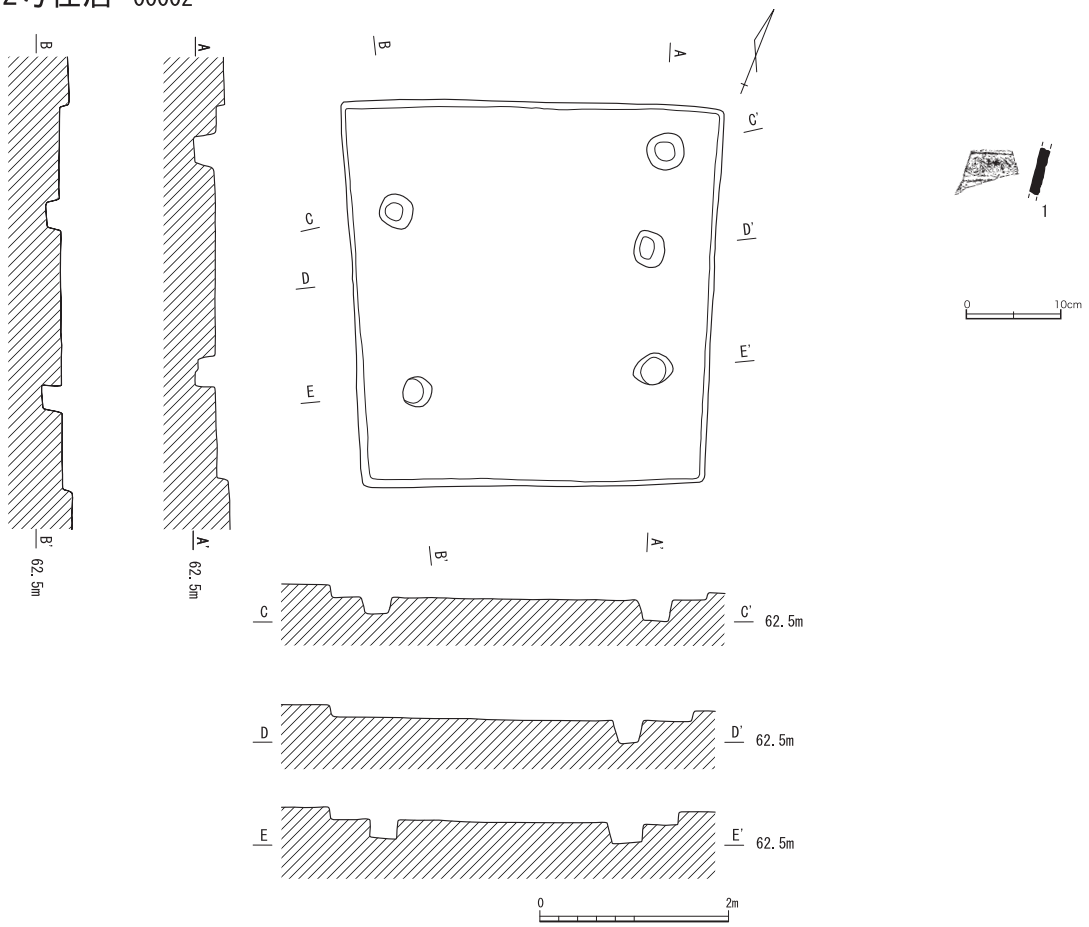
川端遺跡1次調査区全体図

川端遺跡

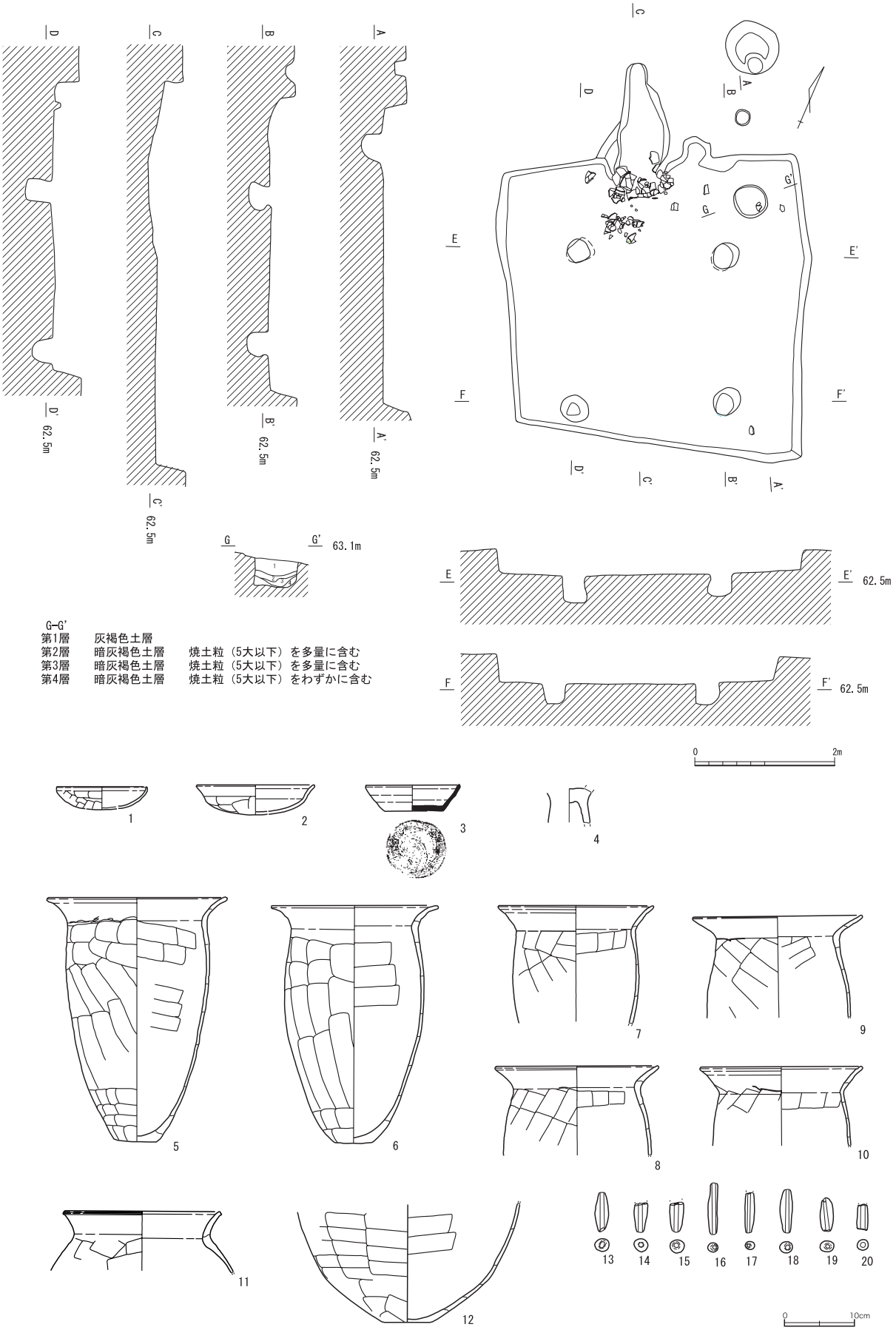
1号住居 00001



2号住居 00002

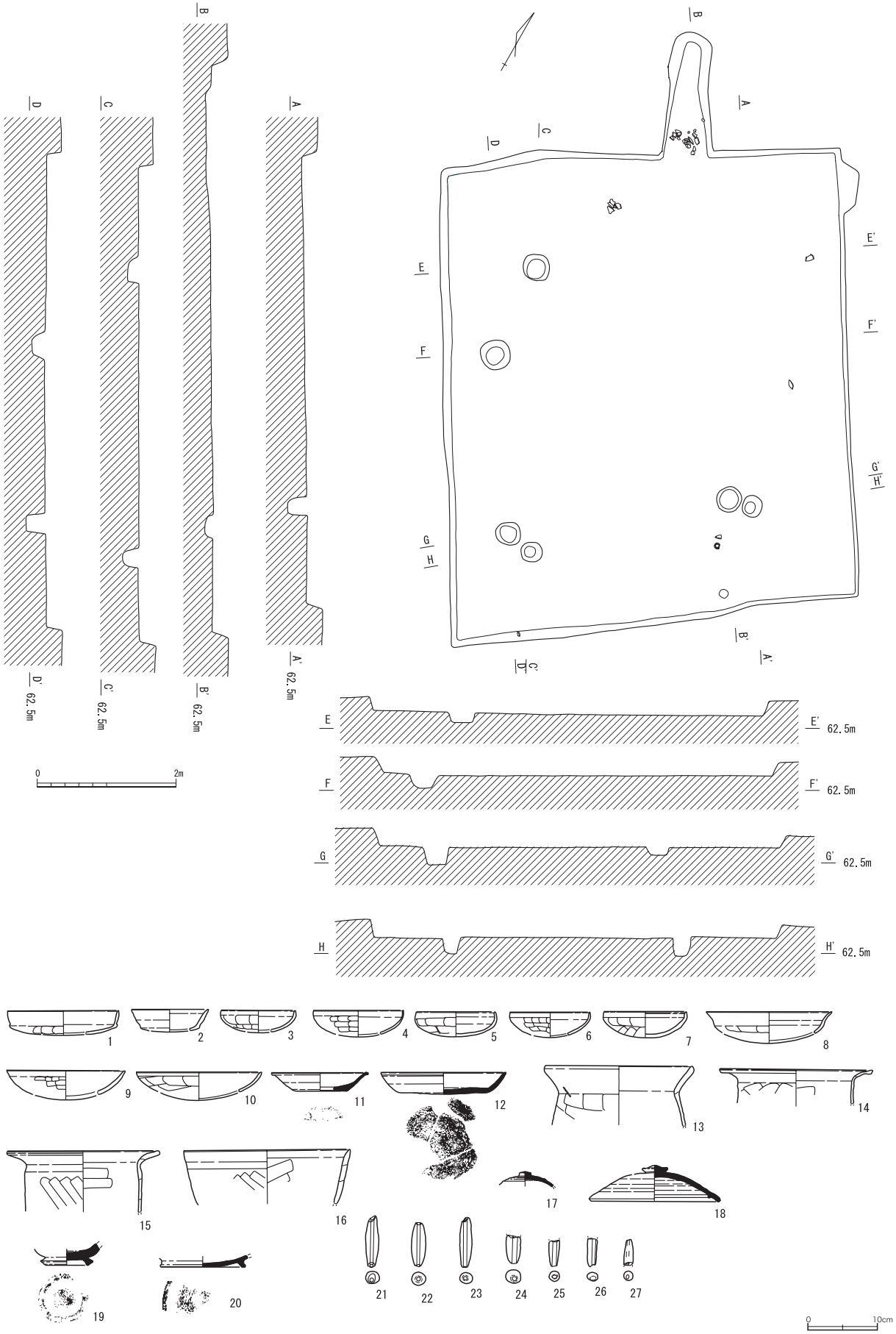


川端遺跡
3号住居　　00003

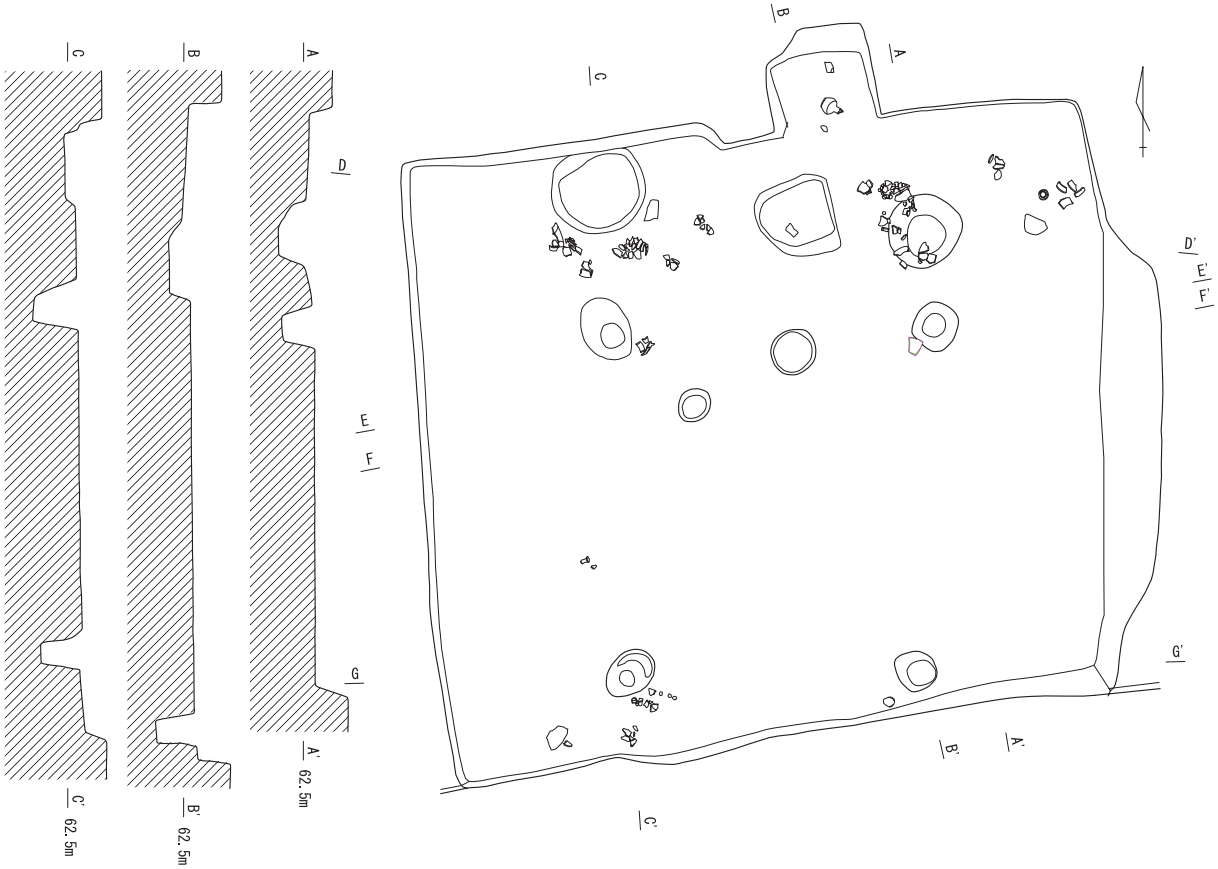


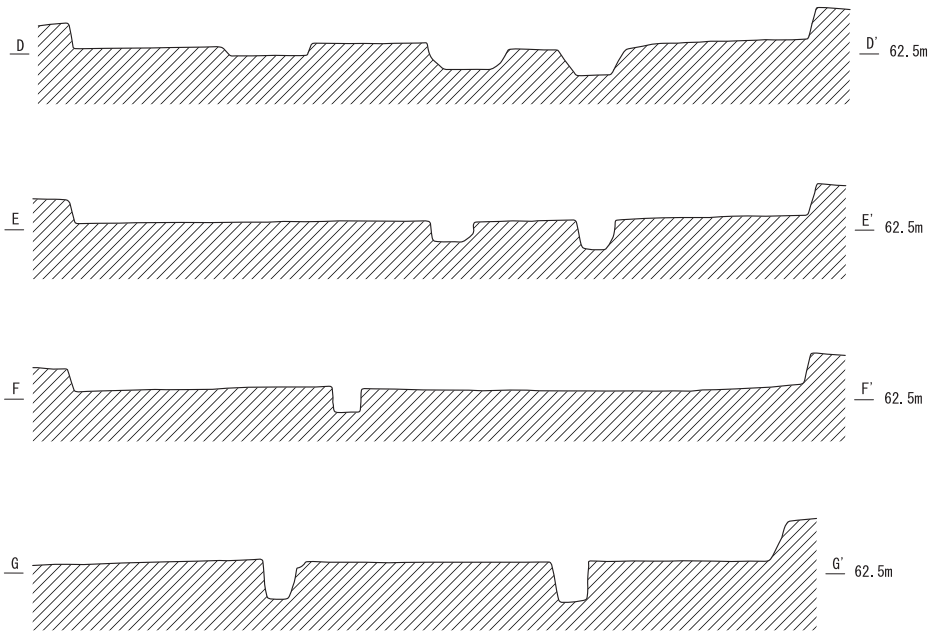
G-G'
第1層　灰褐色土層
第2層　暗灰褐色土層　焼土粒（5大以下）を多量に含む
第3層　暗灰褐色土層　焼土粒（5大以下）を多量に含む
第4層　暗灰褐色土層　焼土粒（5大以下）をわずかに含む

川端遺跡
4号住居　00004



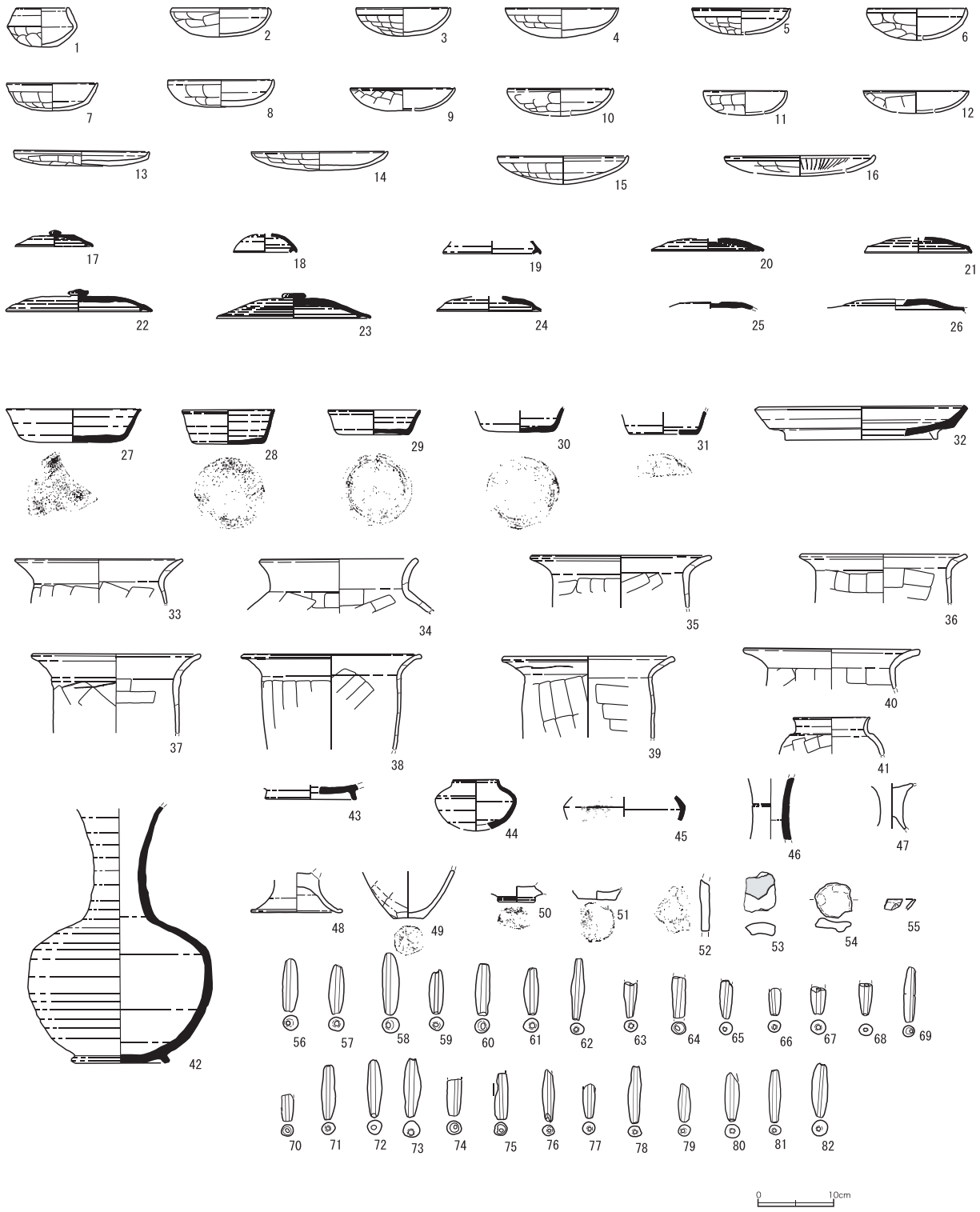
川端遺跡
5号住居　00005





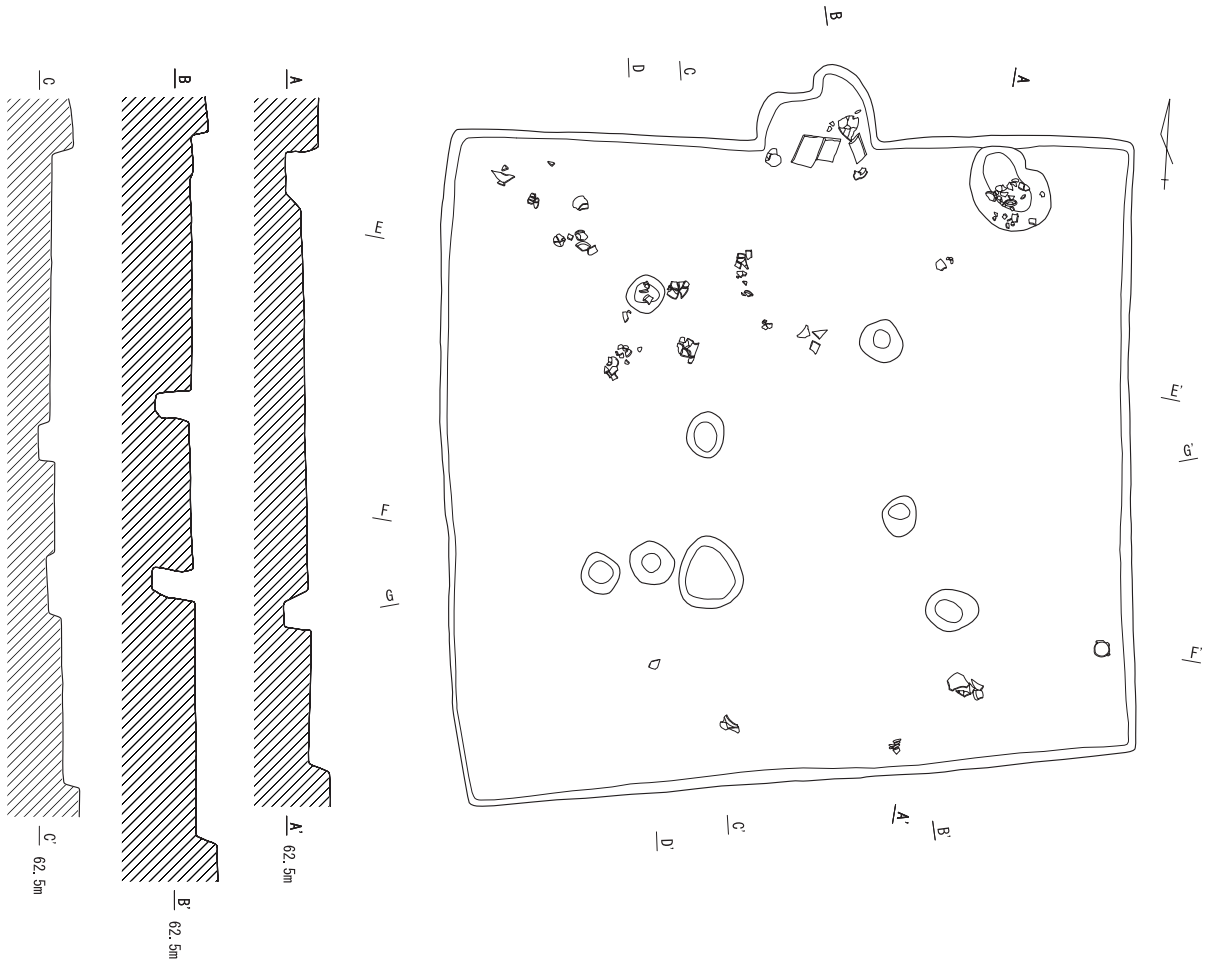
川端遺跡

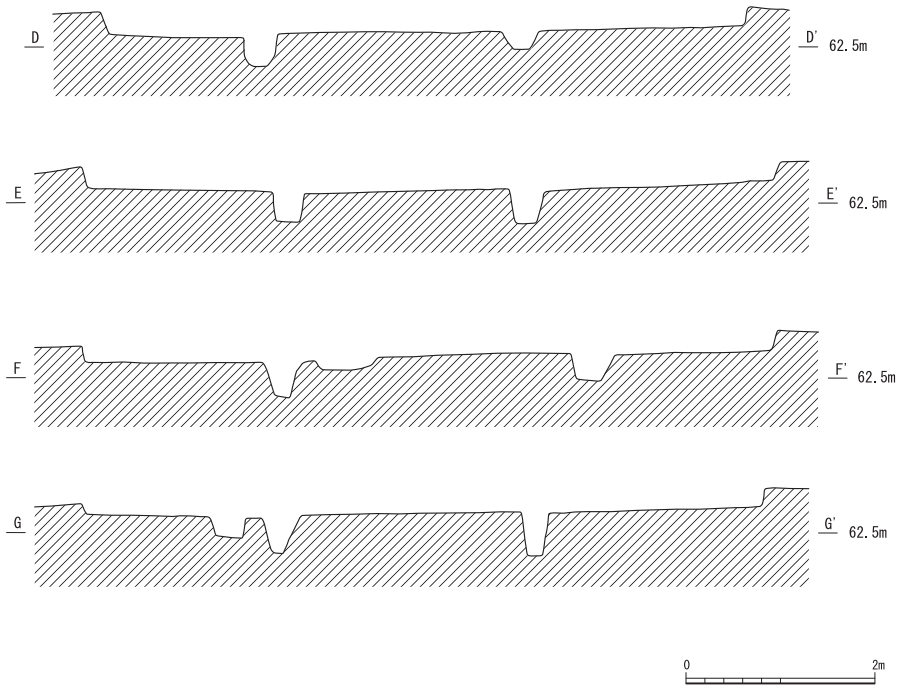
5号住居　00005



川端遺跡

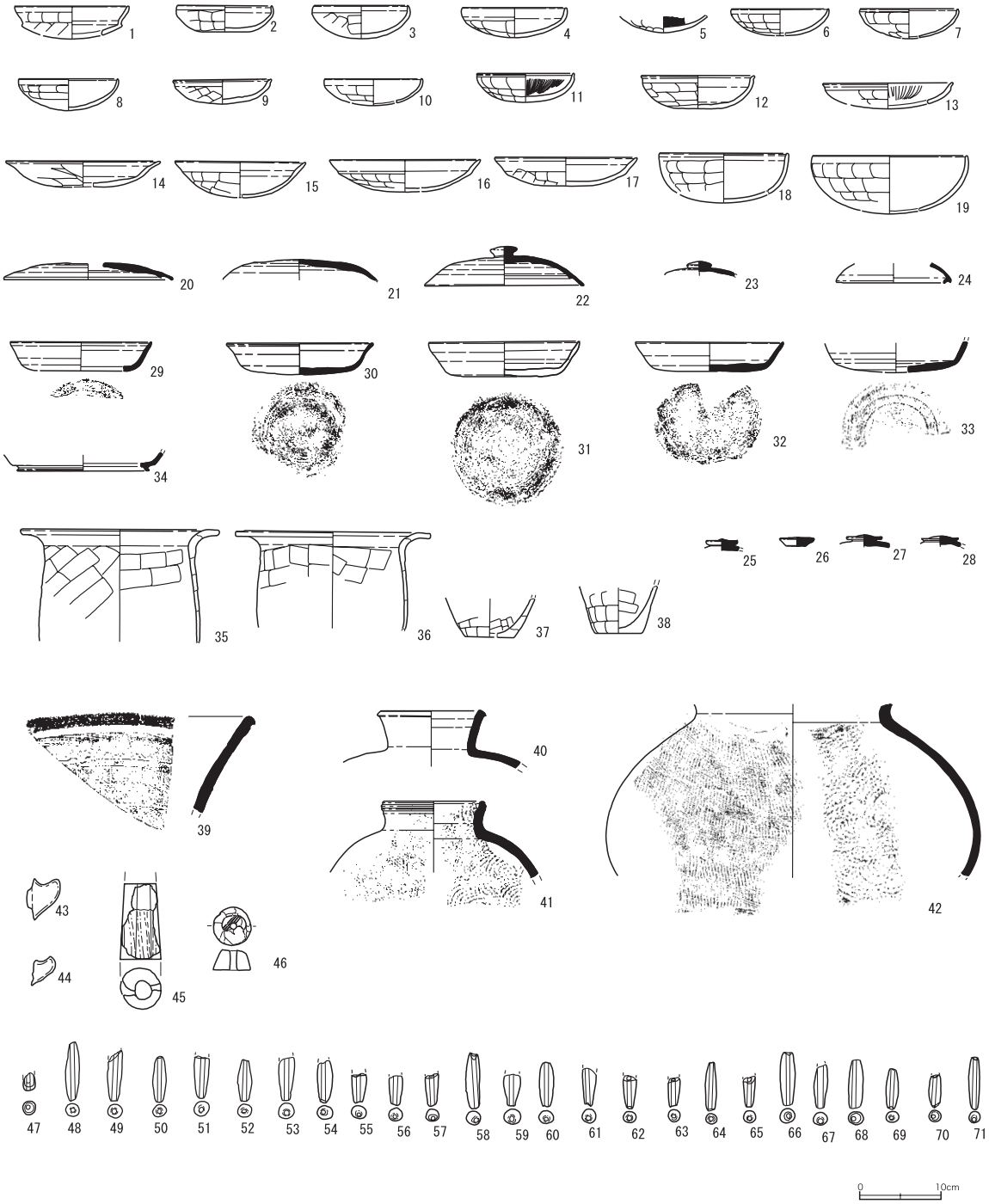
6号住居　00006



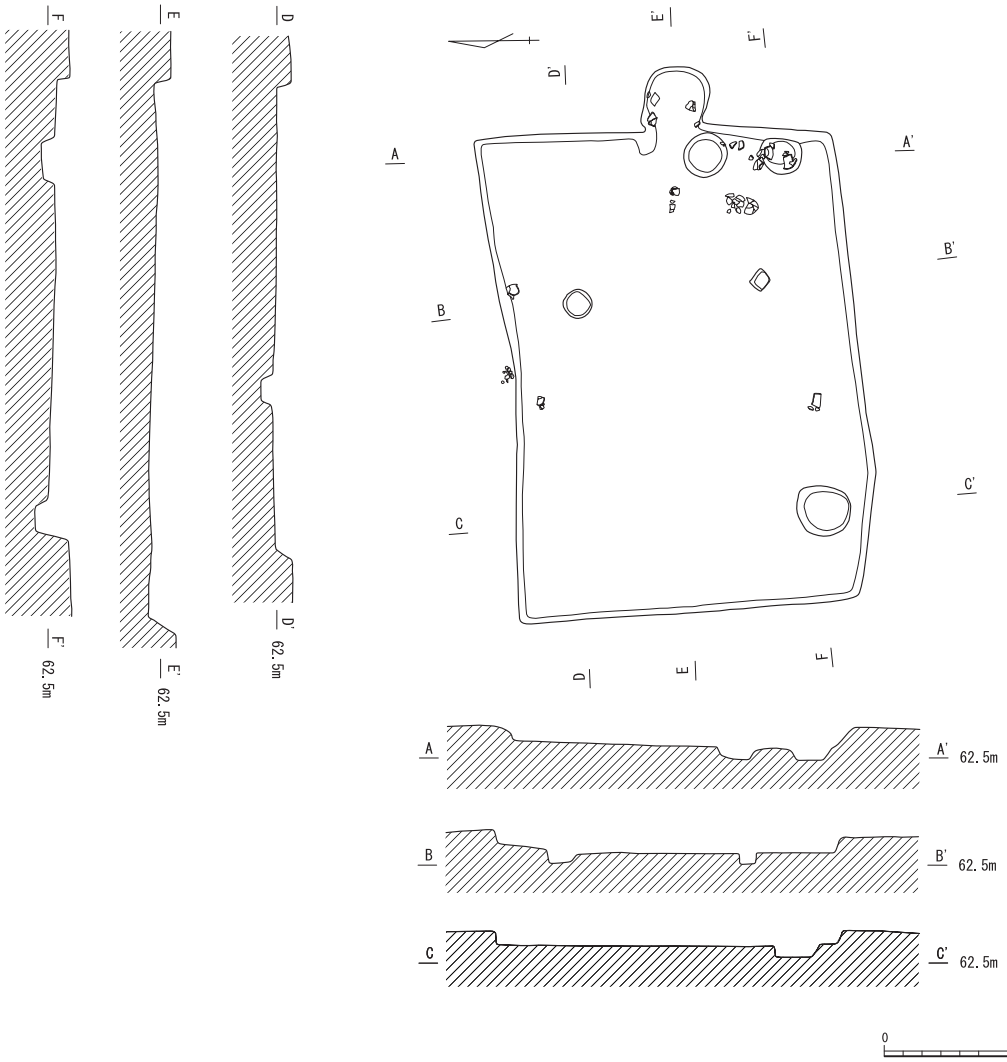


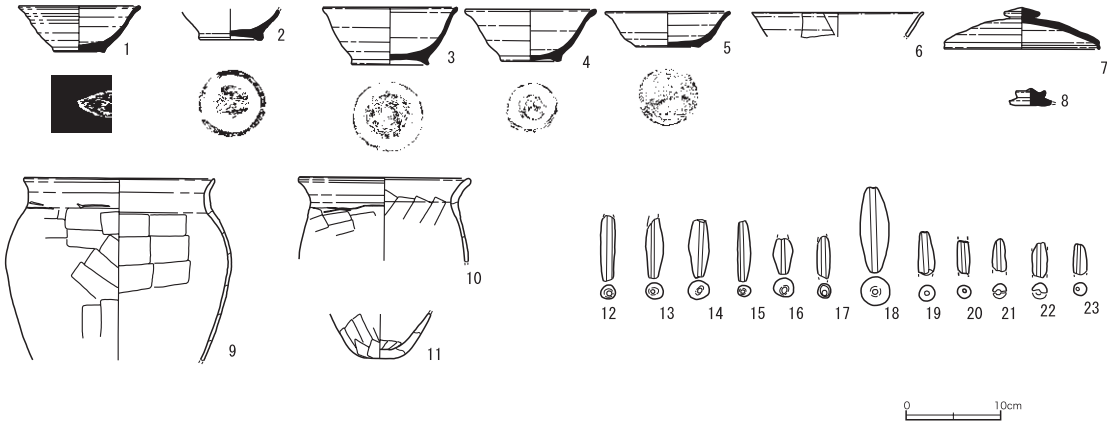
川端遺跡

6号住居 00006



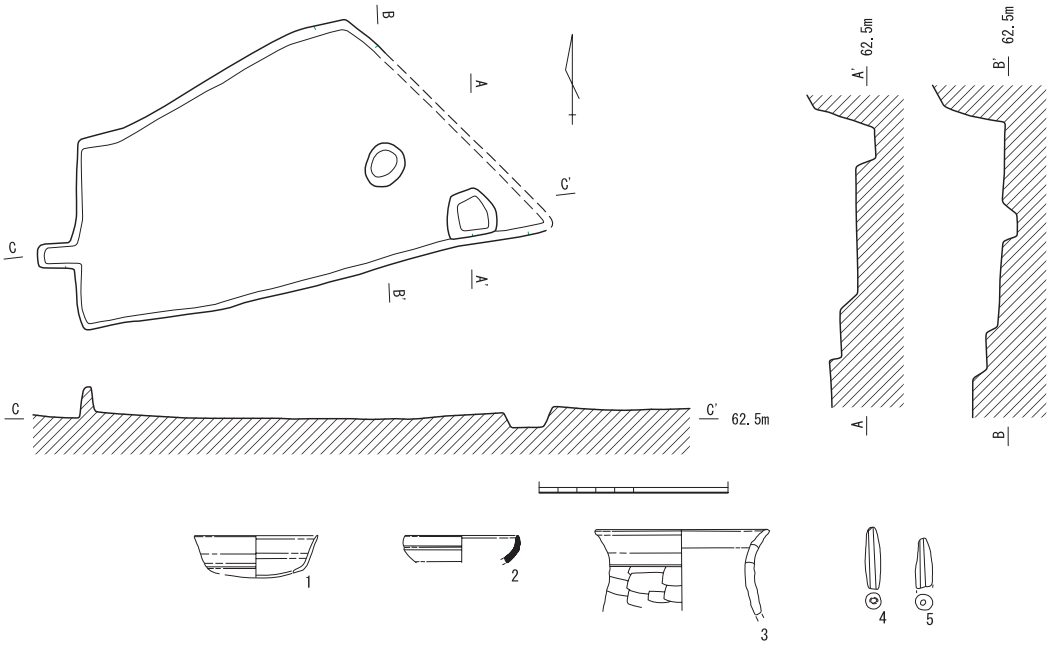
川端遺跡
7号住居　00007



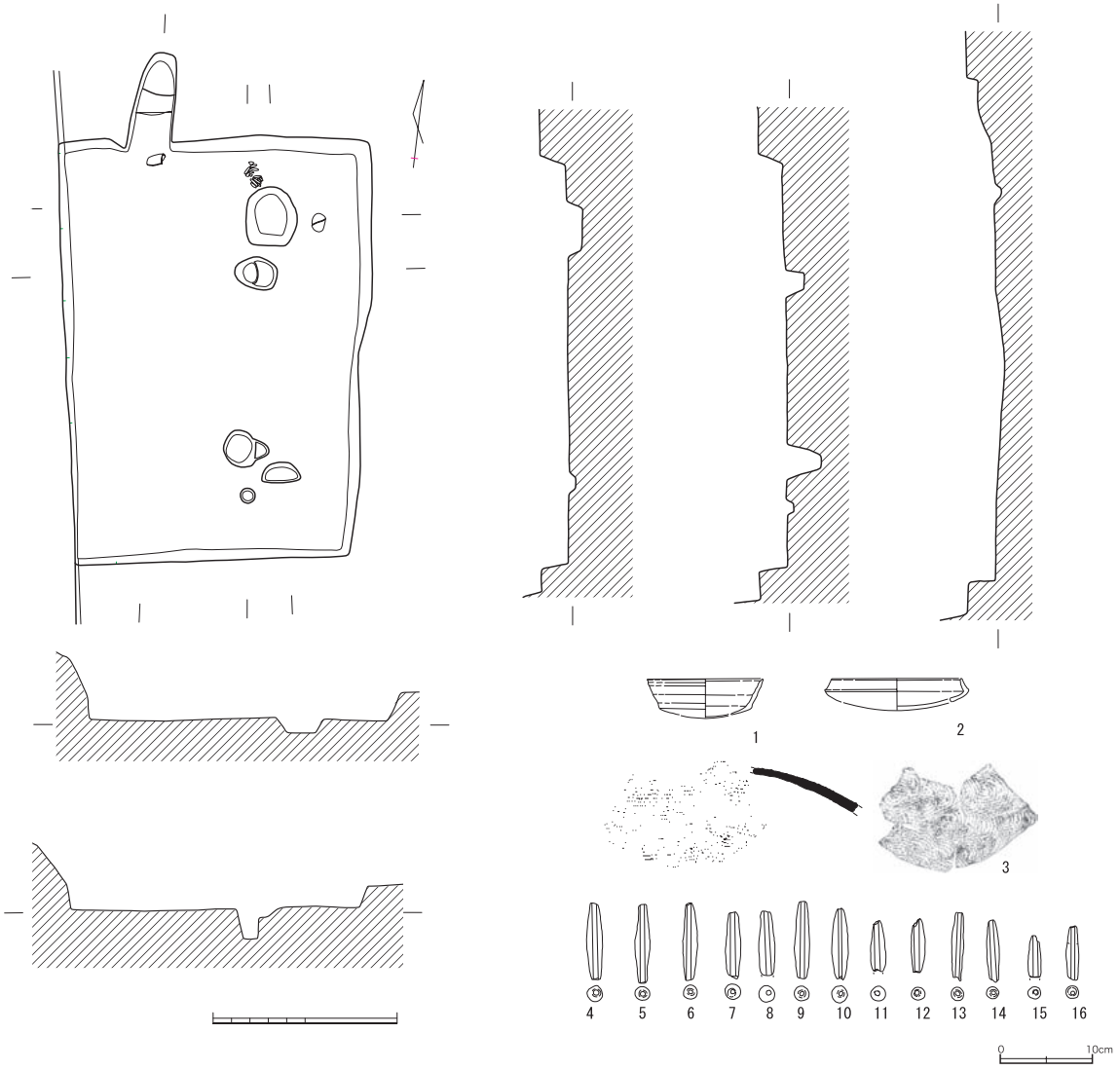


川端遺跡

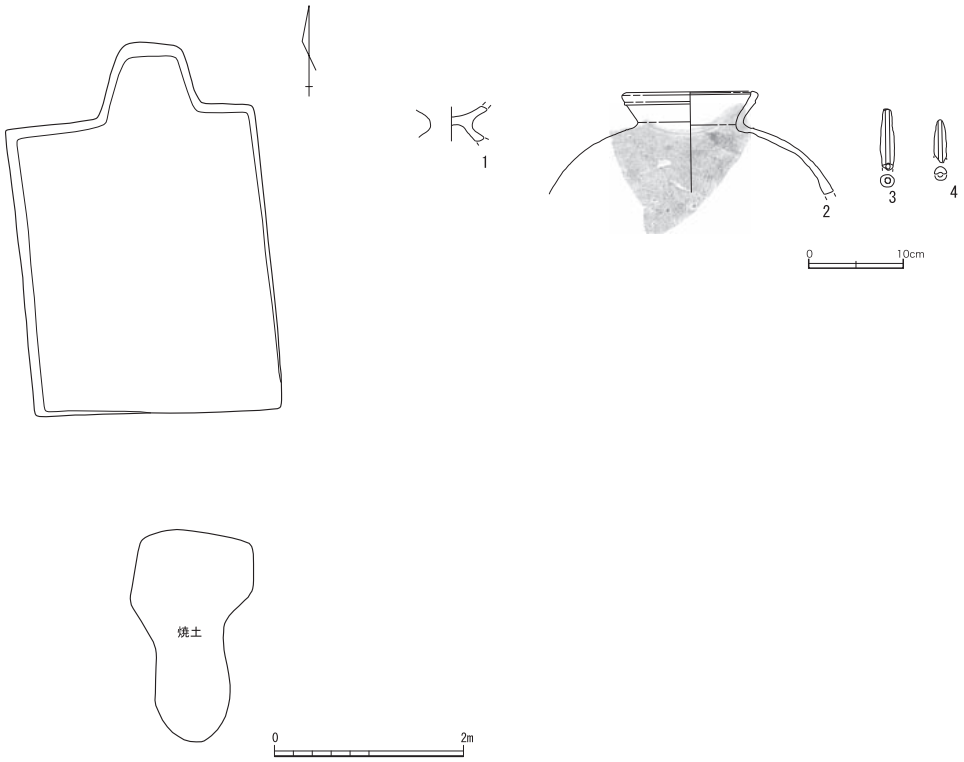
8号住居　00008



9号住居　00009



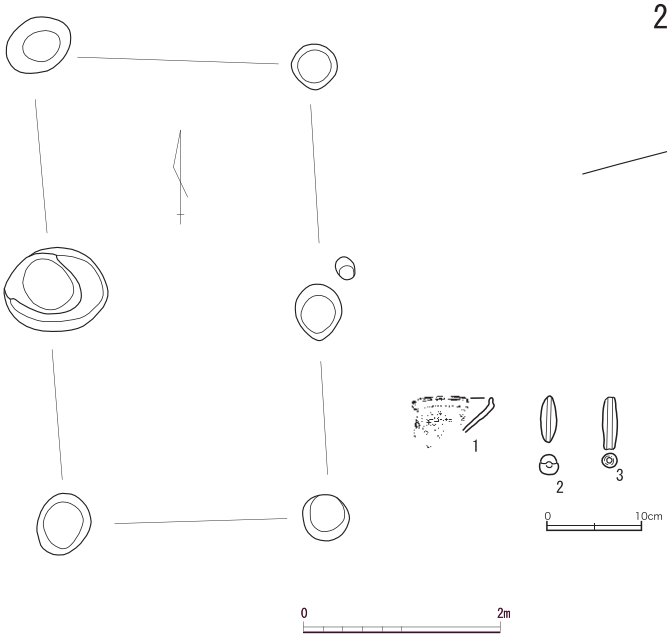
川端遺跡
10号住居　00010



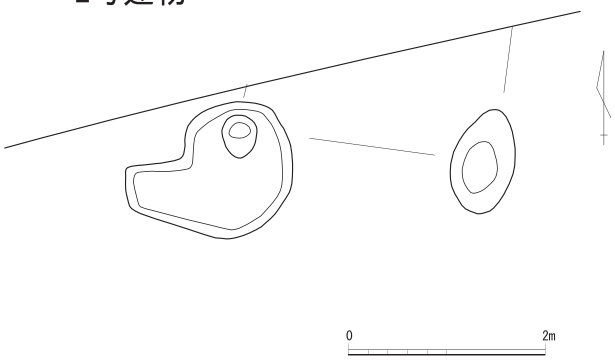
川端遺跡1次調査区全景

川端遺跡

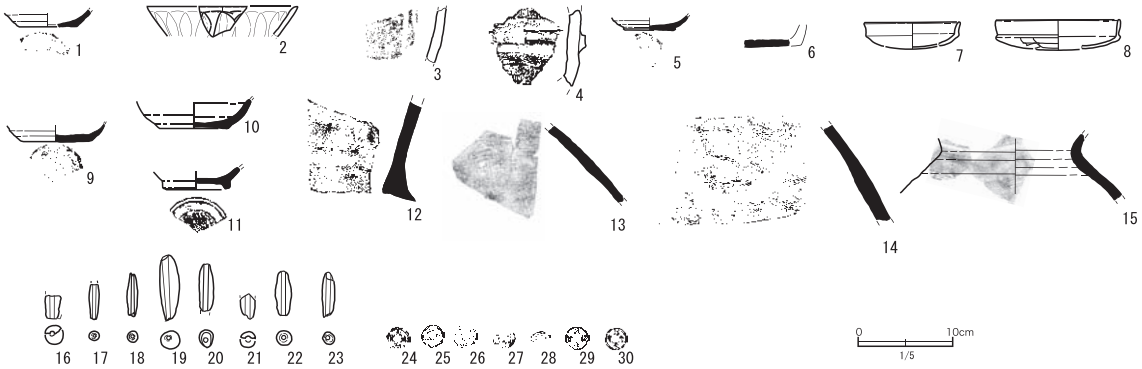
1号建物　00012



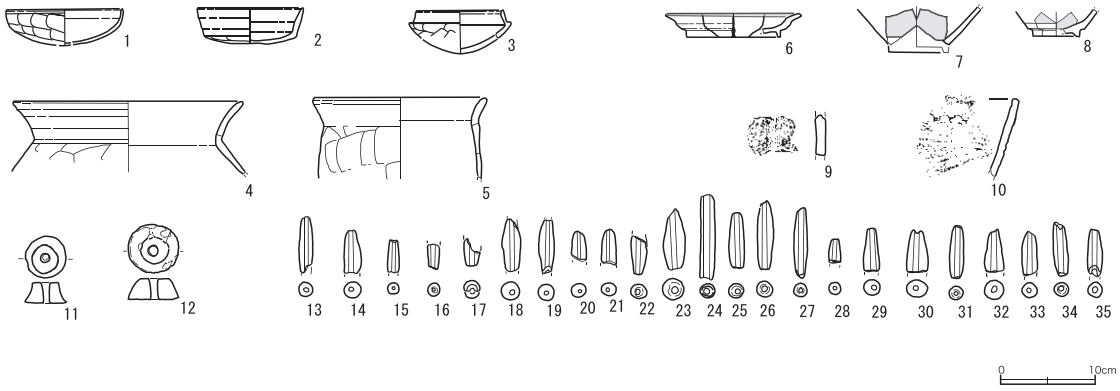
2号建物



柱穴　00013

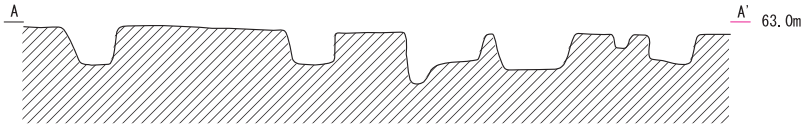


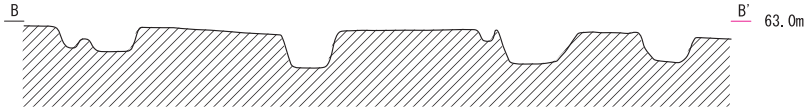
包含層　00014

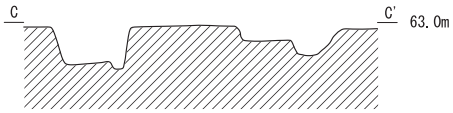


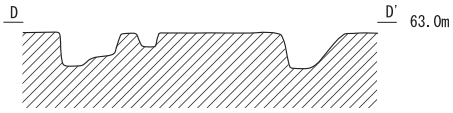
川端遺跡

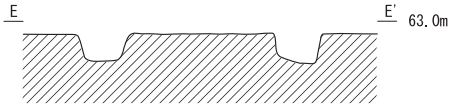
3号建物　00012

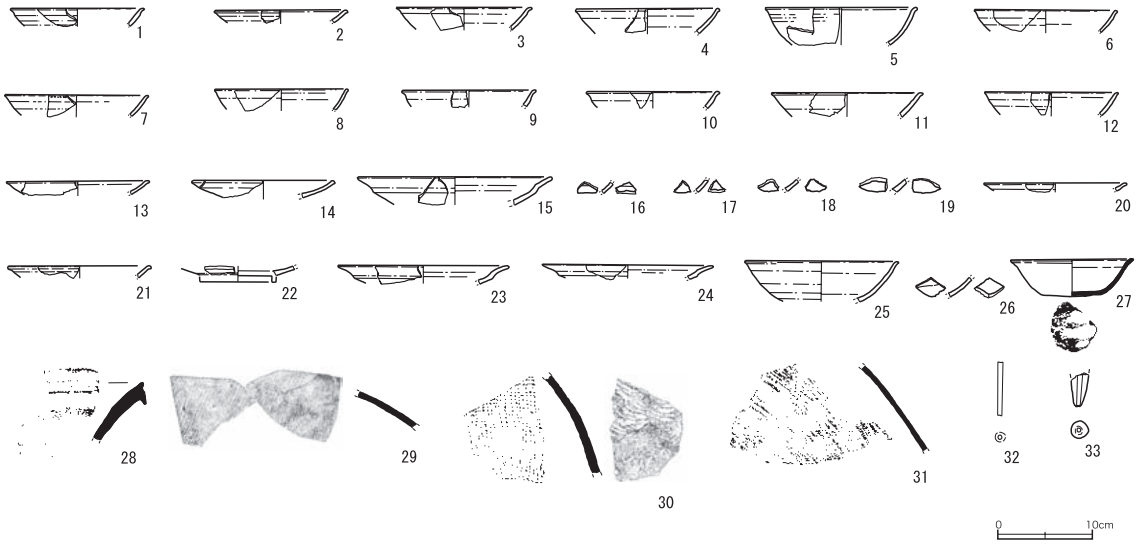












荷鞍ヶ谷戸遺跡２次調査・向山遺跡１次調査

１．本書は、埼玉県深谷市本田字荷鞍ヶ谷戸 1207 番地他に所在する荷鞍ヶ谷戸遺跡２次調査と本田字向山 1179 番地に所在する向山遺跡の発掘調査報告書である。
２．発掘調査の原因は町道 D-257 線建設工事で、調査は川本町遺跡調査会が川本町建設課から依頼を受け発掘調査を実施した。
３．発掘調査及び整理作業の期間は以下の通りである。
　発掘調査　平成９年８月 18 日～11 月８日
　整理期間　平成 16 年度、17 年度で断続的に実施

Ⅰ　発掘調査にいたる経過

旧川本町では、南の平地林に進出する予定の工場立地を促進するため町道 D-257 線を新設することとした。町建設課から協議を受けた町教育委員会は、建設予定地内の遺跡の所在を確認するため、用地取得にあわせ継続的に試掘調査を実施した。その結果、向山地区と、荷鞍ヶ谷戸地区において遺跡の存在が確認され、発掘調査を行うこととした。なお、西側の谷津田から万願寺遺跡にかけても試掘調査を行ったが、遺跡は確認されなかった。そこで町建設課から川本町遺跡調査会が受託し、発掘調査を行った。調査面積は、荷鞍ヶ谷戸地区が 700 ㎡、向山地区が 500 ㎡、である。発掘調査届は平成９年 12 月 10 日付け教文第２－149 号である。

Ⅱ　遺跡の位置

荷鞍ヶ谷戸遺跡は、深谷市の南東に位置し、旧川本地域に位置する。ほぼ東西方向流れる荒川の右岸、江南台地上に立地している。遺跡の西側には谷津田が位置しており、遺跡は緩やかに南西に向かい傾斜し、標高 67m付近に位置する。

荷鞍ヶ谷戸遺跡の１次調査は平成５年に行われており、弥生時代後期の住居１軒と８世紀前半の住居が検出されている。また、南に隣接する百済木遺跡からは古代豪族の居宅と推定される大型建物群をはじめ、縄文時代早期の遺構遺物、中世の寺院と推定される遺構群が発見されている。

Ⅲ　荷鞍ヶ谷戸遺跡の遺構と遺物

調査区は南西傾斜の斜面下位に位置しており、竪穴住居は１軒、土坑３基、遺物包含層（埋没谷）が検出された。遺構の時期は縄文時代後期(1 号住居、2 号土坑)、弥生時代後期（1 号土坑、3 号土坑、遺物包含層）に分けられる。

1. 縄文時代

1 号住居は斜面下位、埋没谷際に位置している。楕円形を呈しており、南壁は斜面により消失する。中央に石囲い埋甕炉が位置し、貼り床、柱穴などは確認できない。炉を石囲いに用いられ

た礫は、チャート質の円礫で、楕円形に配され、被熱により赤化している。埋甕は、深鉢を埋設し、底面に二個体の土器を砕いたものを敷くように埋設する。炉内の土は良く焼けていた。

2 号土坑は、調査区ほぼ中央、斜面上位で検出される。楕円形を呈し深鉢の底部完形品が出土する。土器の周辺からは焼土が検出された。

このほかに1号住居と2号土坑間の斜面上に堆積した黒色土から早期、後期の土器が出土する。早期の土器は細隆起線で施文する野島式土器で内面には、条痕文が残る。住居と土坑出土の土器は、堀ノ内Ⅱ式である。縄文時代の石器としては礫器、スタンプ形石器がある。

２．弥生時代

1 号土坑は、調査区東側、1 号住居の西に隣接して斜面に位置する。楕円形を呈し、断面は皿状を呈する。覆土中から浅鉢が出土する。

3 号土坑は、調査区北壁際で検出される。楕円形を呈し南側は斜面により立ち上がりが確認されない。覆土中から弥生後期土器片が出土する。

遺物包含層は、調査区南西で東西方向に形成された、埋没谷の中から弥生土器が集中して検出された。谷底からは、炭化物が集中して検出された。

出土した土器は、後期吉ヶ谷式土器の壺、甕、高坏である。石器は、３号土坑から出土した棒状磨り石、敲石のほか、包含層から扁平磨石、台石が出土する。

Ⅳ　向山遺跡の調査

荷鞍ヶ谷戸遺跡の東 500m の地点で、向山遺跡が発見された。窪んだ谷状の底から井戸 1 基と風倒木痕 4 基が検出された。1 号井戸は素掘りのもので、円形を呈し、中半から底面よりはすぼまる漏斗状を呈する。遺物はないが底面に河原礫 1 点が検出された。

Ⅴ　まとめ

荷鞍ヶ谷戸遺跡の調査では、縄文時代後期前半の住居が土坑とともに確認された。は東に 100 mほど離れた同一支谷内に位置する四反歩遺跡からは、後期前半の住居が緩斜面地から 1 軒検出された(註 1)。隅丸方形で中央に石囲い炉を有するもので、石囲い炉内には土器が敷かれていて、本住居例と類似している。江南台地では単独の住居で構成される後期の小規模集落が目立ち、短期の居住を繰り返す集団の存在が推定される。

また、1 次調査に引き続き弥生時代後期の遺跡の広がりが確認された。江南台地北部では谷を開析する谷津田地形に沿って、弥生時代後期の遺跡が立地するが本調査でも同様の傾向が把握された。出土遺物のうち棒状磨り石、扁平磨石などの石器は、この地域の生業を物語る特徴的な遺物ということができる(註 2)。

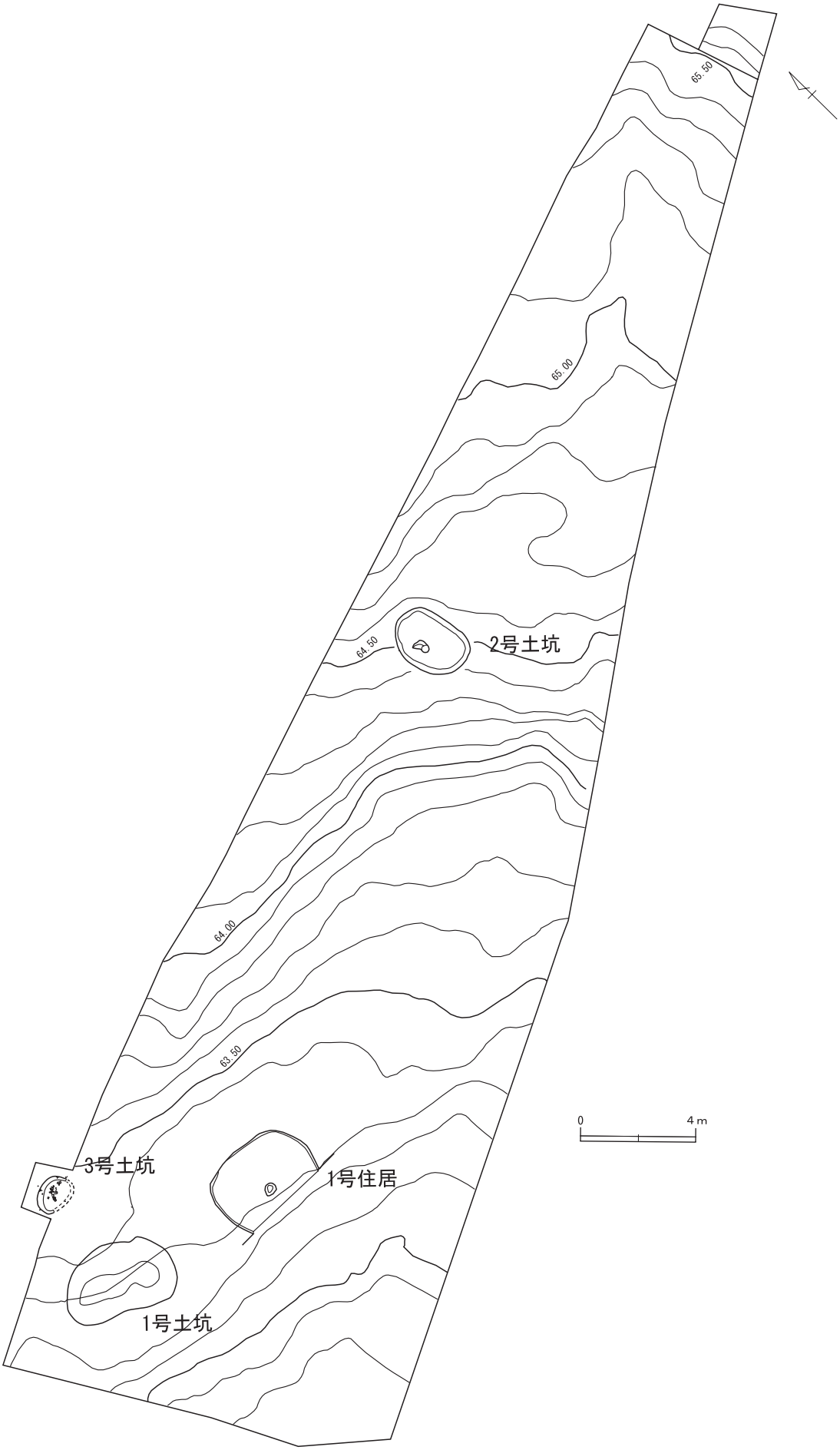
(註 1)1993「四反歩遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 130 集

(註 2)2003.「吉ヶ谷期の石器文化」埼玉考古第 38 号

山ノ腰遺跡
竹ノ花
白草遺跡
諦光寺
円阿弥遺跡
北篠場北遺跡
下大塚遺跡
権現堂北遺跡
権現堂遺跡
周辺

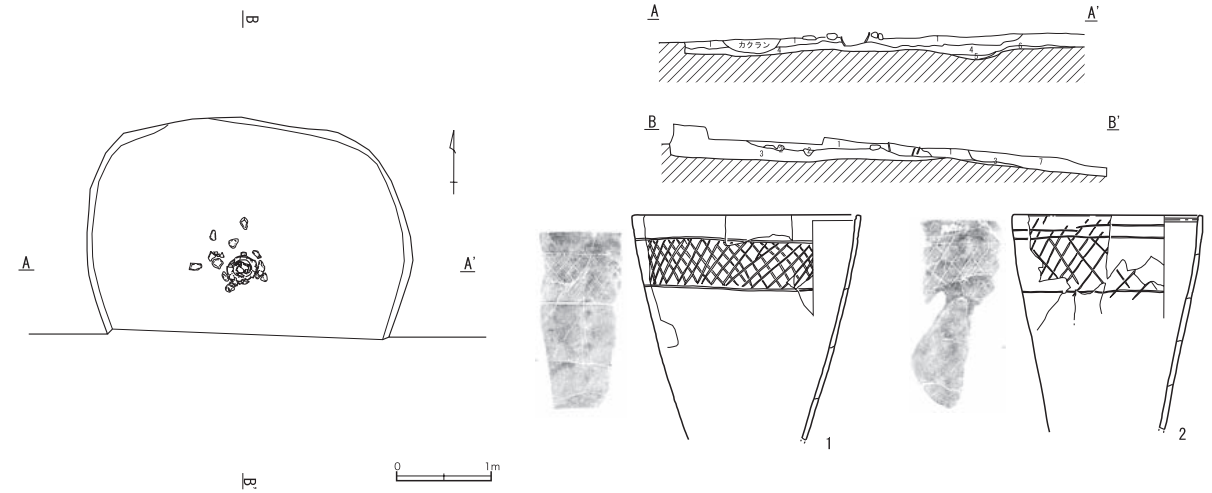
舟山遺跡
遺跡
荷鞍ヶ谷戸遺跡
廃寺
1次調査区
向山遺跡
2次調査区
四反歩遺跡
百済木遺跡
の遺跡
0
2km

荷鞍ヶ谷戸遺跡2次調査区全体図



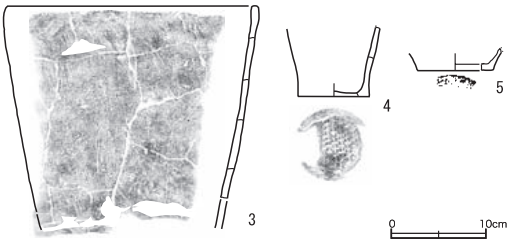
荷鞍ヶ谷戸遺跡

1号住居 00001

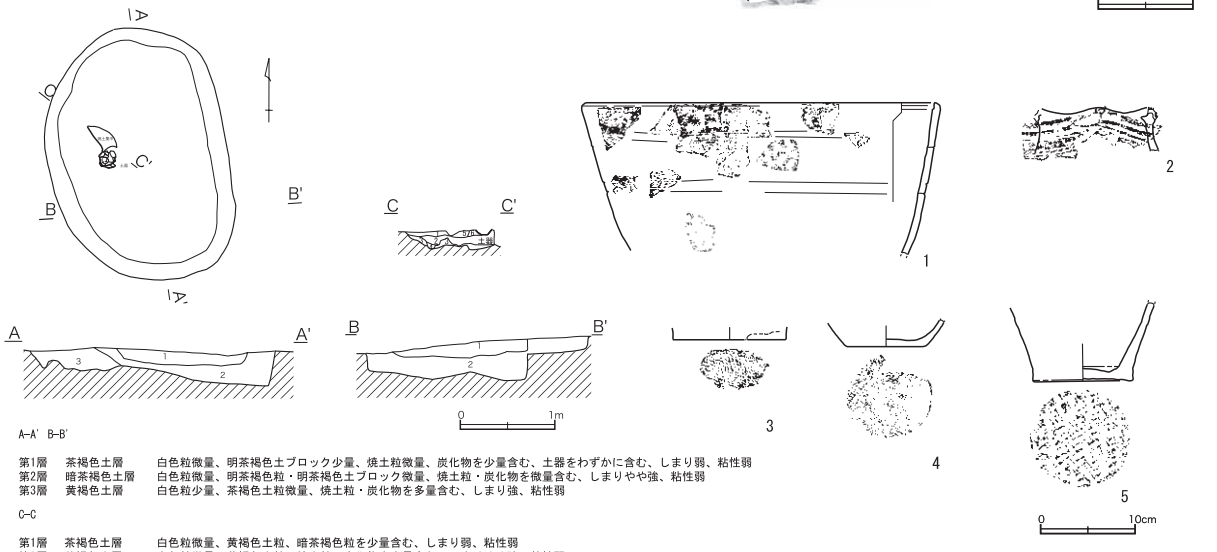


1号住居

第1層	黒褐色土層	ロームブロック5mm大、1mm大のローム粒を多量に含む、下部に焼土粒を多く含む
第2層	茶褐色土層	焼土層、径1mm大の焼土粒・ブロックを多量に含む、炭化粒も含む
第3層	黄褐色土層	ロームブロックを多量に含む
第4層	黒色土層	谷部の土層、白色粒を多量に含む、下部に地山の黄褐色土層ブロックが混ざる、焼土粒を少量含む
第5層	暗茶褐色土層	鉄分が沈殿した層、酸化鉄を多く含む
第6層	黄褐色土層	褐色土と黄褐色土の混土層　　谷状遺構堆積土層
第7層	黒灰褐色シルト土層	ローム粒を多く含む、炭化粒・焼土粒を少量含む、粘性土



2号土坑 00002



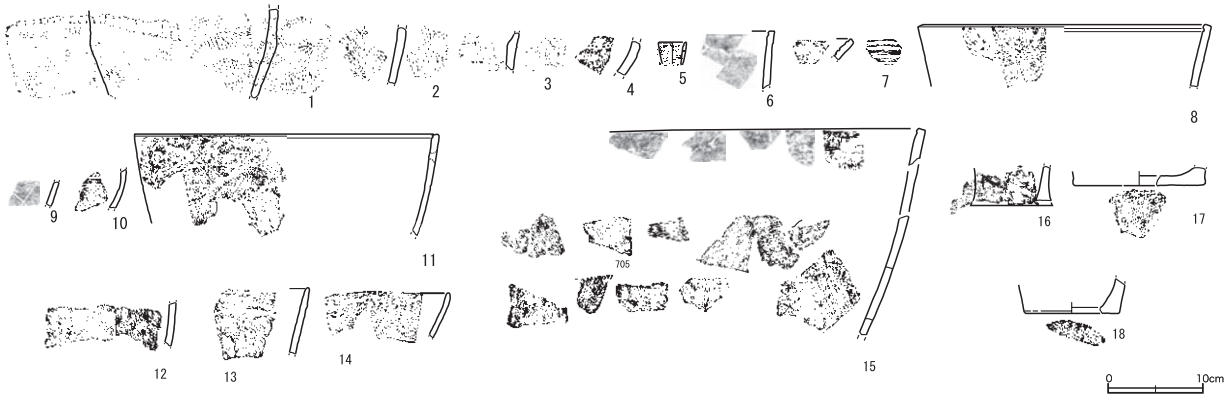
A–A' B–B'

第1層	茶褐色土層	白色粒微量、明茶褐色土ブロック少量、焼土粒微量、炭化物を少量含む、土器をわずかに含む、しまり弱、粘性弱
第2層	暗茶褐色土層	白色粒微量、明茶褐色粒・明茶褐色土ブロック微量、焼土粒・炭化物を微量含む、しまりやや強、粘性弱
第3層	黄褐色土層	白色粒少量、茶褐色土粒微量、焼土粒・炭化物を多量含む、しまり強、粘性弱

C–C

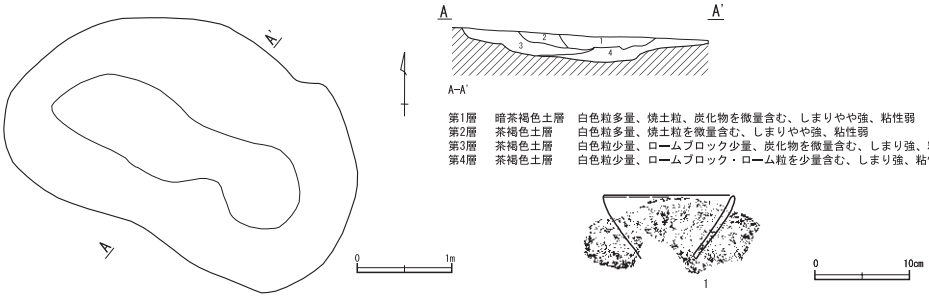
第1層	茶褐色土層	白色粒微量、黄褐色土粒、暗茶褐色粒を少量含む、しまり弱、粘性弱
第2層	茶褐色土層	白色粒微量、黄褐色土粒・焼土粒・炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性弱
第3層	薄茶褐色土層	径2程の黄色土ブロック多量、焼土粒を微量含む、しまり強、粘性強
第4層	茶褐色土層	黒色土粒少量、黄褐色土粒・炭化粒を微量に含む、しまりやや強、粘性弱
第5層	暗茶褐色土層	黒褐色土粒微量、焼土粒・炭化粒を多量含む、しまりやや強、粘性やや強
第6層	暗茶褐色土層	黒褐色土粒微量、焼土粒・炭化粒を少量含む、しまりやや強、粘性弱

縄文時代包含層 00003



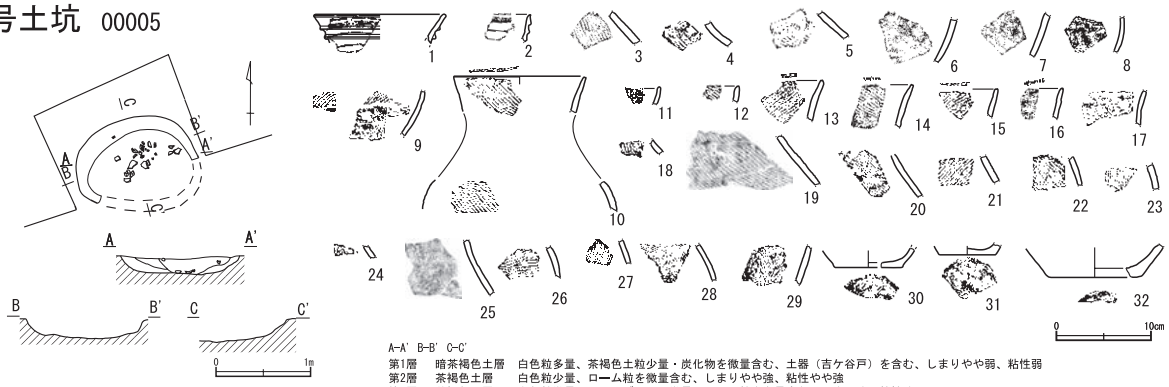
荷鞍ヶ谷戸遺跡

1号土坑 00004



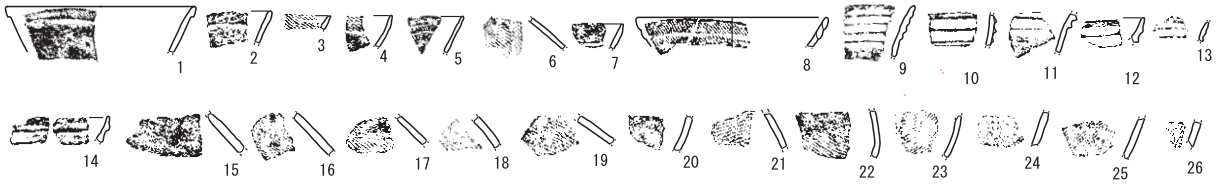
第1層　暗茶褐色土層　白色粒多量、焼土粒、炭化物を微量含む、しまりやや強、粘性弱
第2層　茶褐色土層　白色粒多量、焼土粒を微量含む、しまりやや強、粘性弱
第3層　茶褐色土層　白色粒少量、ロームブロック少量、炭化物を微量含む、しまり強、粘性やや強
第4層　茶褐色土層　白色粒少量、ロームブロック・ローム粒を少量含む、しまり強、粘性強

3号土坑 00005

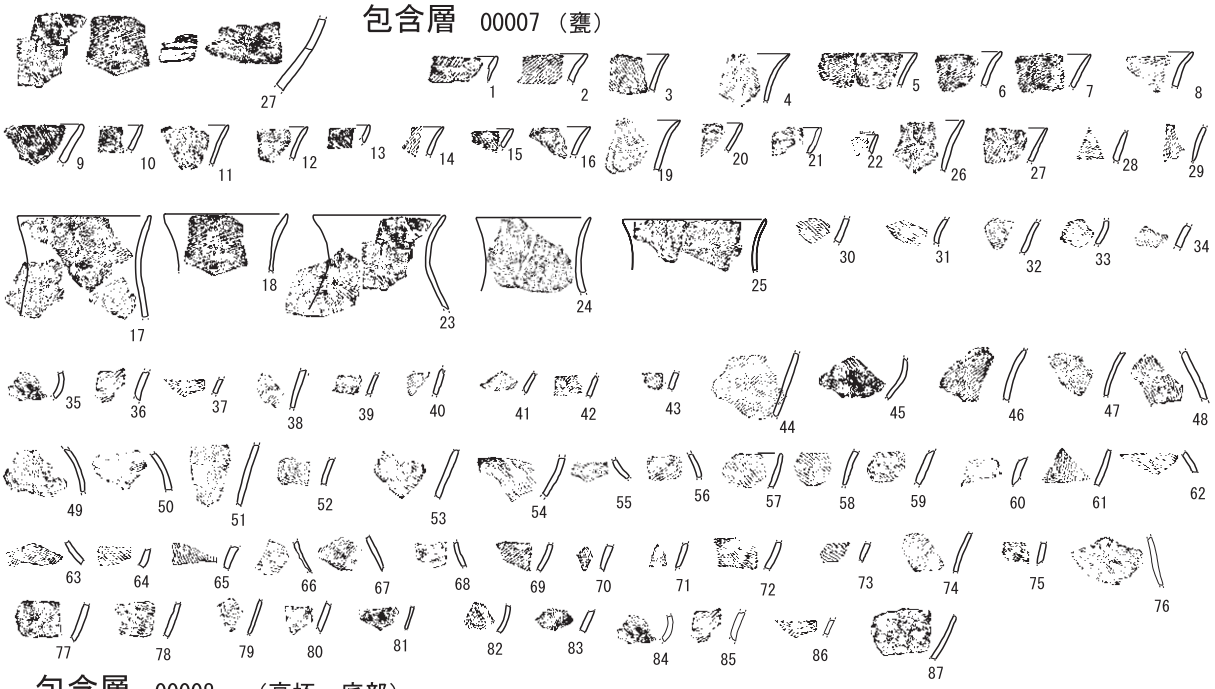


A-A' B-B' C-C'
第1層　暗茶褐色土層　白色粒多量、茶褐色土粒少量・炭化物を微量含む、土器（吉ケ谷戸）を含む、しまりやや弱、粘性弱
第2層　茶褐色土層　白色粒少量、ローム粒を微量含む、しまりやや強、粘性やや強
第3層　茶褐色土層　白色粒微量、ロームブロック微量、ローム粒を多量含む、しまり強、粘性強
第4層　茶褐色土層　白色粒微量、ローム粒少量、暗茶褐色土粒（1層）を少量含む、しまり強、粘性強

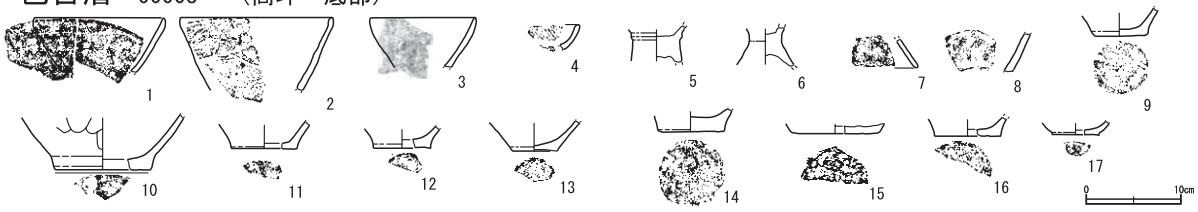
弥生時代包含層 00006（壺）



包含層 00007（甕）



包含層 00008（高坏・底部）



報告書抄録

フ リ ガ ナ	ｶﾜﾊﾞﾀｲｾｷ　ﾆｸﾗｶﾞﾔﾄｲｾｷ　ﾑｶｲﾔﾏｲｾｷ					
書　　名	川端遺跡１次調査、荷鞍ヶ谷戸遺跡２次調査・向山遺跡1次調査					
副 書 名						
シ リ ー ズ	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書				巻次	91
編 著 者	村松　篤					
編 集 機 関	深谷市教育委員会					
所 在 地	〒366-0823　埼玉県深谷市本住町１７－７　TEL　048-572-9581					
発 行 日	2007年3月30日					
所 収 遺 跡	所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
川端遺跡	深谷市畠山	11406135	36°13′26	139°26′88	1987/11/1～12/19	1000㎡	下水処理場建設
所 収 遺 跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
川端遺跡	集落	縄文後期	包含層		土器		
	集落	古墳時代	住居2、建物2		土師器、金環、土錘		
	集落	奈良平安	住居8、建物1、柱穴		須恵器、土師器		
	集落	中　世	柱穴		青磁、古銭		
調査の概要	荒川河岸段丘上に立地する。北側は荒川本流に接しており、川幅が狭く交通の要所であったことが推測される。古墳時代後期から平安時代にかけて継続する集落で、隣接する如意遺跡と同様の立地を見せる。8世紀初頭の出土品や平安時代の掘立柱建物の柱穴から緑釉陶器破片が注目される。また、土錘の多量出土は荒川を舞台とした漁労活動の活発さを示すものと考えられる。					
所 収 遺 跡	所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
荷鞍ヶ谷戸遺跡	深谷市本田	11406110	36°12′13	139°30′61	1997/8/18～11/8	840㎡	道路建設
所 収 遺 跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
荷鞍ヶ谷戸遺跡	集落	縄文早期	包含層		条痕文土器、礫器		
	集落	縄文後期	住居1、土坑1		堀ノ内式土器		
	集落	弥生後期	土坑2、包含層		吉ヶ谷式土器、石器		
向山遺跡	集落	中　世	井戸1		特になし	他風倒木痕あり	
調査の概要	江南台地上の道路幅の調査。埋没谷に縄文早期と弥生後期の包含層を形成する。この埋没谷をのぞんで斜面下位から縄文後期住居と弥生後期土坑が形成される。後期の住居は隅丸方形を呈し、石囲炉の中央に埋甕を埋設し、底面には大型破片を敷き詰めている。弥生後期は吉ヶ谷式土器が出土し、石器を伴出する。本遺跡の南限にあたるものと考えられる					

川端遺跡　　１次調査
荷鞍ヶ谷戸遺跡２次調査
向山遺跡　　1次調査
平成19年3月30日
編集発行　深谷市教育委員会
印刷　　凸版印刷株式会社

写　真　図　版

川端遺跡

1号住居　00001

西から

遺物出土状態

耳環

3号住居　00003

南から

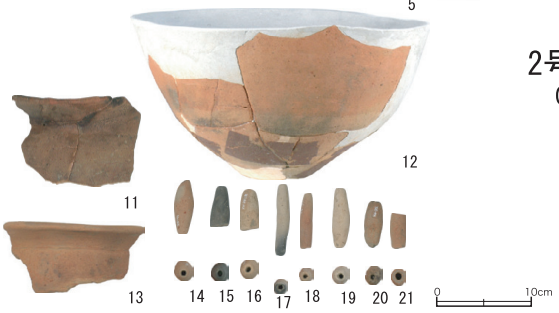
遺物出土状態

カマド前面遺物

カマド土層

東から

カマド



2号住居
00002

東から

川端遺跡

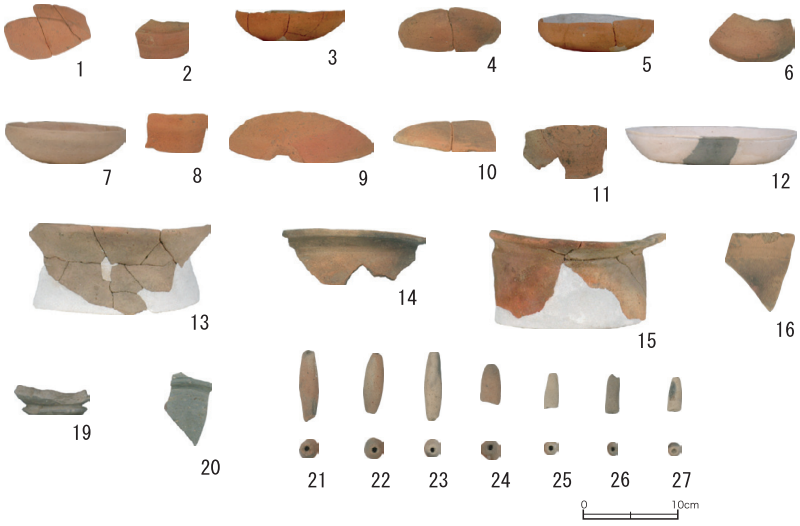
4号住居　00004

東から

カマド

土師器坏

南から



5号住居　00005

南から

東から

カマド前面

遺物出土状態

カマド内遺物

カマド

土師器坏

須恵器長頸壺

紡錘車

川端遺跡

5号住居　00005

川端遺跡
6号住居　00006

南から

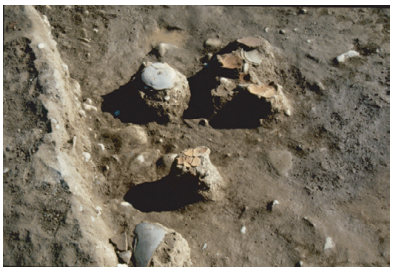
南から

西から

カマド

カマド

遺物出土状態


遺物出土状態

貯蔵穴上面

貯蔵穴上面

須恵器坏蓋

須恵器坏

調査風景

川端遺跡

6号住居　00006

川端遺跡

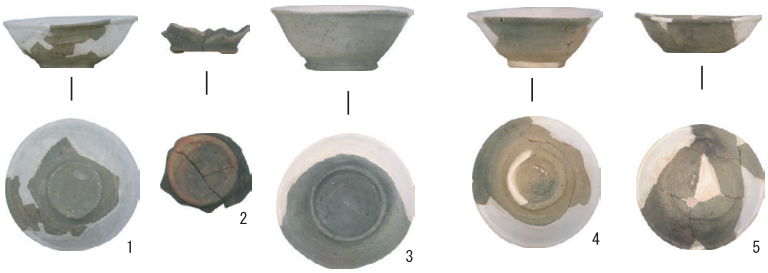
7号住居　00007

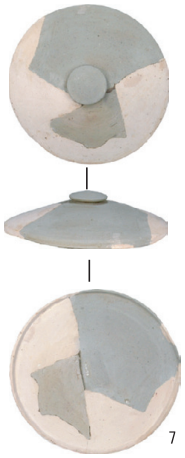
西から

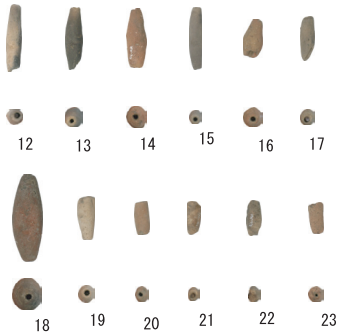
カマド

須恵器高台坏

須恵器高台坏







8号住居　00008

10号住居　00010

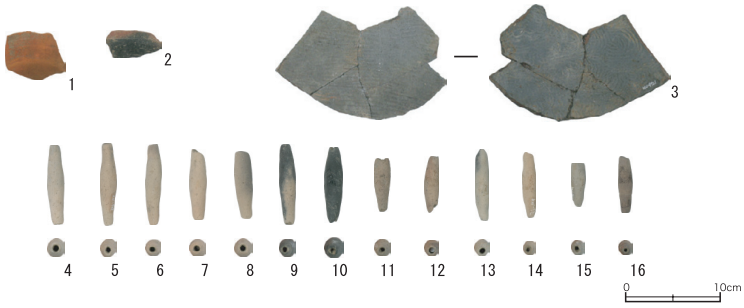
9号住居　00009

南から

西から

東から

カマド



川端遺跡
柱穴群

東柱穴群南から

東柱穴群北から

31号柱穴緑釉陶器

西柱穴群南から

西柱穴群北から

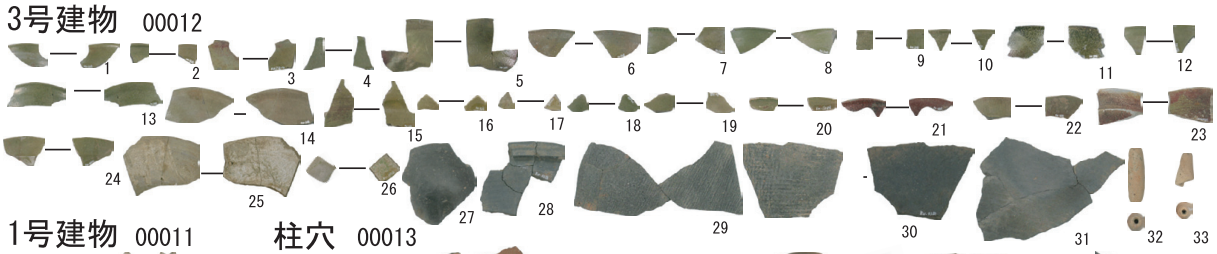
75号柱穴古銭出土状態

31号柱穴緑釉陶器

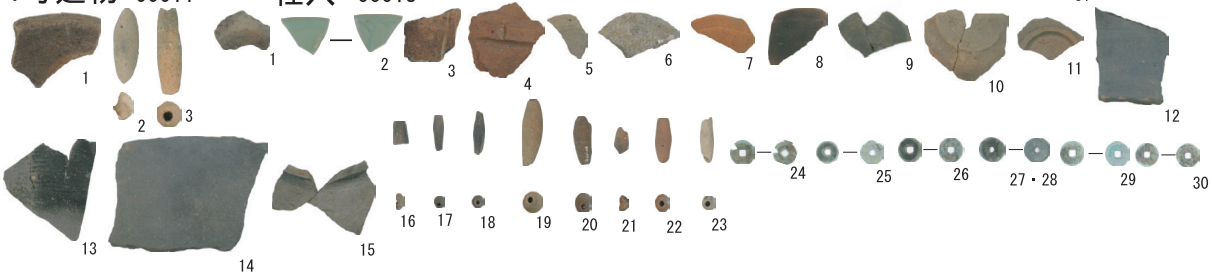
南から

東から

3号建物　00012



1号建物　00011　　柱穴　00013



包含層　00014

荷鞍ヶ谷戸遺跡

1号住居　00001

東から

南から

床面状態

石囲炉

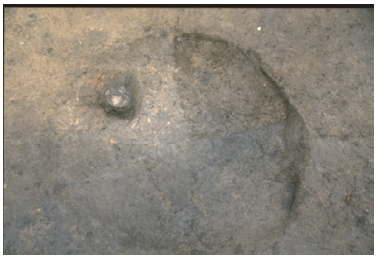
土層

炉内埋甕

2号土坑　00002

遺物出土状態

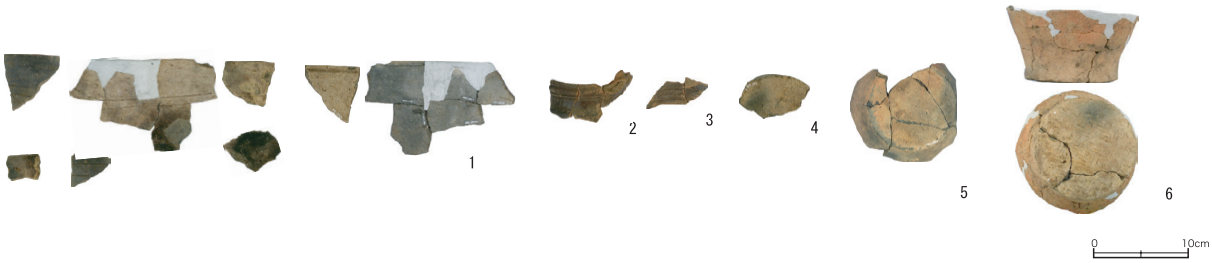
確認状態


完掘（東から）

完掘（南から）

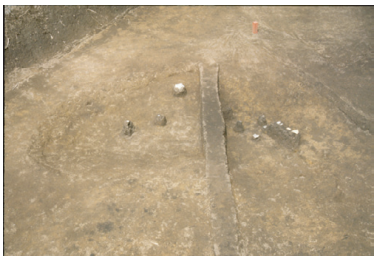
焼土分布

土器出土状態

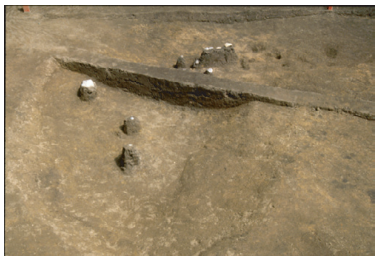


荷鞍ヶ谷戸遺跡

1号土坑　00003



遺物出土状態



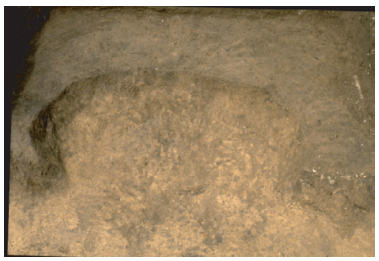
土層

3号土坑　00004

西から

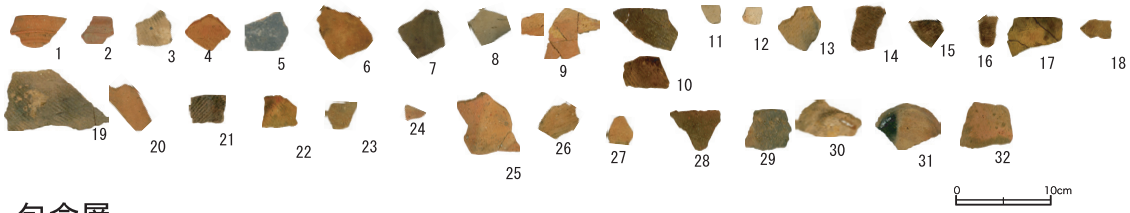
遺物出土状態

確認状態



完掘

土層



包含層

確認面（東から）

完掘（西から）

完掘（東から）

谷開口部（東から）

縄文包含層

土器出土状態

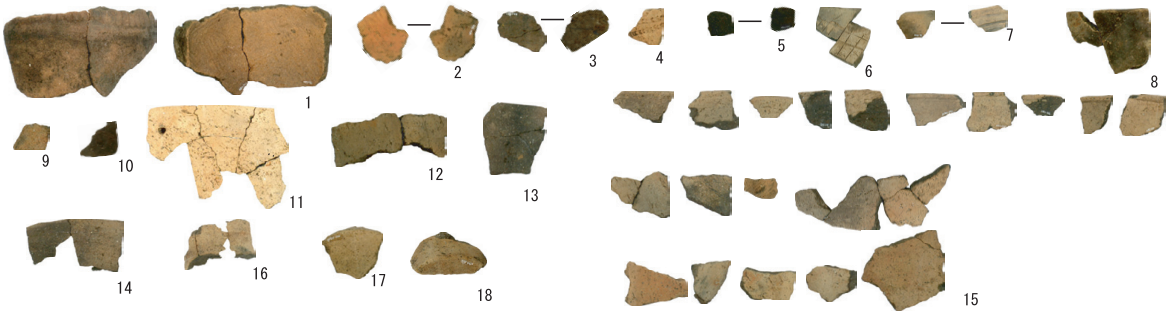
荷鞍ヶ谷戸包含層

炭化材検出状態

石器出土状態

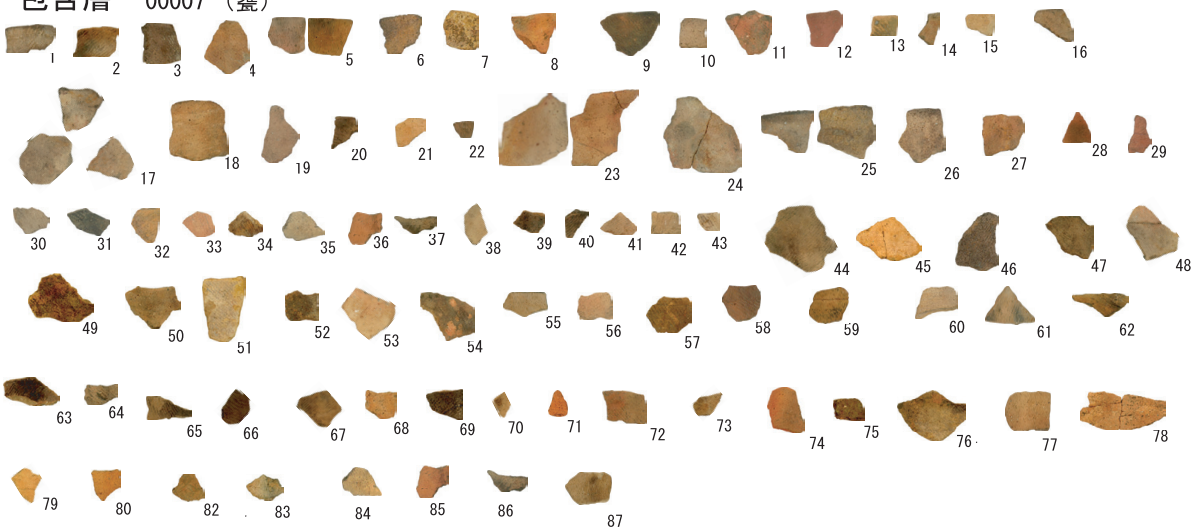
条痕文土器

包含層　00003

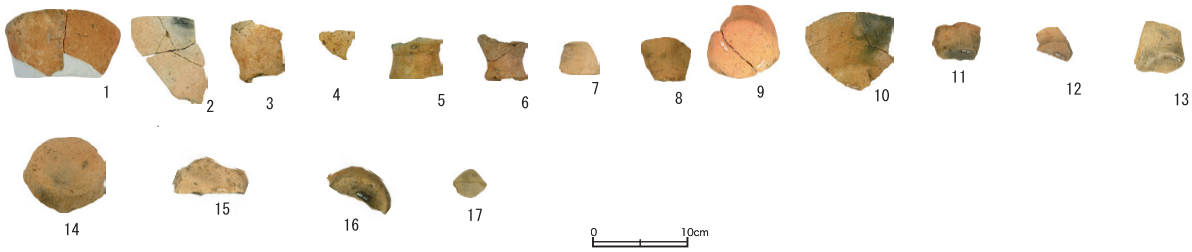


包含層　00006　（壺）

包含層　00007　（甕）

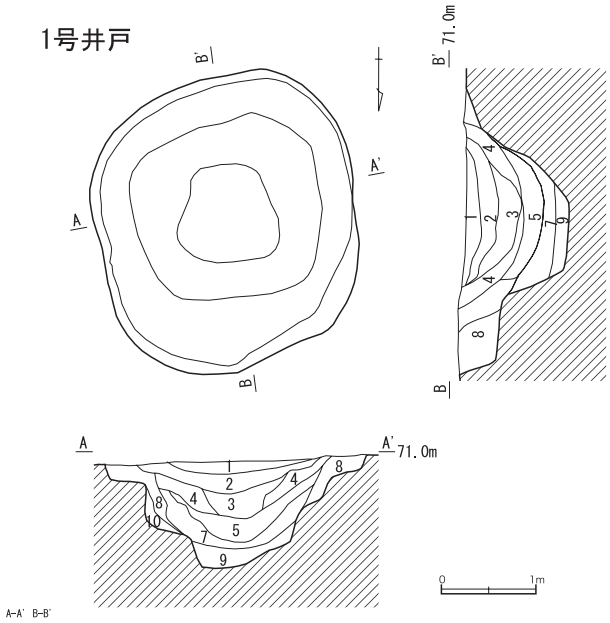


包含層　00008　（高坏・底部）



荷鞍ヶ谷戸遺跡
石器　00009

向山遺跡



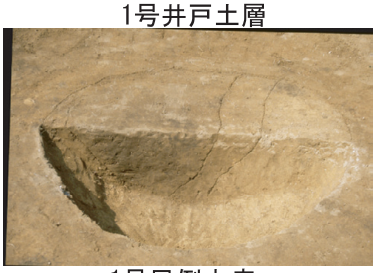
第1層	黒褐色土層	白色粒を多量・炭化物少量・焼土粒を微量に含む。茶褐色粒を微量に含む。しまり・粘性弱
第2層	黒褐色土層	白色粒を少量・炭化物微量に含む。茶褐色土ブロック・茶褐色粒を多量に含む。しまり・粘性弱
第3層	黒褐色土層	白色粒を微量に含む。茶褐色土ブロック・茶褐色粒を少量に含む。しまり・粘性弱
第4層	茶褐色土層	炭化物・ローム粒、を微量に含む。黒褐色土ブロック・黒褐色粒を少量に含む。しまり・粘性強
第5層	茶褐色土層	ローム粒・黒褐色土粒を少量含む。黒褐色土ブロックを微量に含む。しまり・粘性強
第6層	茶褐色土層	ローム粒を多量・黒褐色土粒を微量・黒褐色土ブロックを少量含む。しまり・粘性強
第7層	黄褐色土層	ローム粒を多量・ロームブロック・黒褐色土粒を微量に含む。しまり・粘性強
第8層	黄褐色土層	ローム粒を多量・ロームブロックを少量・炭化物・焼土粒を微量に含む。しまり・粘性強
第9層	黄褐色土層	ローム粒・ロームブロックを多量に含む。黒褐色土粒を微量に含む。しまり・粘性強
第10層	黄褐色土層	ローム粒・ロームブロックを多量に含む。黒褐色土粒を微量に含む。しまり・粘性強

1号井戸

1号井戸土層

1号井戸断面

1号井戸底面出土礫


1号風倒木痕

2号風倒木痕

3号風倒木痕

4号風倒木痕

5号風倒木痕